

## 第 13 回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 10 日（土）午前 9 時 30 分～午後 0 時 30 分

2 場所 長野県庁西庁舎 1 階 111 号会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	若麻績 享則委員
森野 貞雄副委員長	清水 保委員
青木 一委員	坂口 昌夫委員
中沢 一委員	小山 壽一委員
小山 元彦委員	宮本 精一委員
市川 浩一郎委員	丸山 稔委員

4 開会

（三澤教育支援主事）

皆さま、おはようございます。

本日はご多忙のところ、お差し繰りいただきましてお集まりいただき、誠にありがとうございます。本日も、また委員会のほう、よろしくお願いいたします。

それでは委員長さん、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

おはようございます。

それでは、第 13 回高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

本日は前回の続きで、第 3 区、第 4 区の議論をしていきたいと思います。先ほど屋代南高等学校の存続と発展を願う会の方々から署名をいただきました。1 万 5,090 筆。内容は、最後のところだけ読ませていただきますと、「屋代南高等学校を多部制・単位制の高校とすることなく、今日までの歴史と伝統を継承しながら存続させることを強く訴えるものです」という、文面に対しての署名です。生徒さん、それから考える会の方々から直接いただきました。

屋代南高校のこの会の方々を考えておられることは、11 回のときにご説明いただいたと思いますので、議論の参考に生かしていただきたいというふうに思います。

この後事務局のほうから説明、それから今日は資料もございますので、そちらの説明をいただいて、その後でまた地区・団体の情報がありましたら、ご紹介いただいてから協議のほうに入っていきたいと思います。

それでは、事務局から、他の推進委員会の様子をお伝えください。

（三澤教育支援主事）

よろしくお願いいたします。

それでは資料の説明の前に、ほかの推進委員会、第 2 通学区、第 3、第 4 通学区の推進委員会の様子をご報告したいと思います。

第 2 通学区、東信地区でございますが、第 12 回が 11 月の 27 日日曜日に行われておりま

す。地域からの提案の中で、多部制・単位制高校にかかわる提案があった2団体から説明を聞き、審議の参考にしております。望月高校を多部制・単位制に転換するという、地域からの提案につきまして、地域教育プラットフォームの活用など関心が示されました。

一方近隣の蓼科高校と共存していくことへの不安の声というのも、多く出されております。また望月高校、蓼科高校を統合して、新たな学校をつくること、これも提案されておまして、賛成意見も出されましたが、引き続き検討していくということであります。

第3通学区ですが、第12回が12月4日日曜日に行われております。第9区、高等学校の未来検討委員会で検討されました再編整備候補案について報告されております。第9区からは、飯田長姫高校と飯田工業高校の統合案が提案されております。

第9区の定時制についても、昼間部と夜間部を持った、統合された高校に設置するという提案がございます。それ以外は、箕輪工業高校の定時制、それと上伊那農業高校の定時制は、設置される多部制・単位制高校に統合するという方向が確認されております。

7区におきましては、地元の理解がまだ得られてはおりません。地元の提言を聞く機会を推進委員会の中で設けることとしたということであります。

第4通学区、中信地区であります。第13回が同じく12月の4日日曜日に行われております。第12区、大北地域になりますが、ここの個別論議、3回目の個別論議を行っております。大北地区4高校の存続と高校の在り方を考える会からの提案がございまして、2学級増やせば、大北地区の学級数をそのまま維持できるといったことについて審議がされております。

その結果学級数を増やしても、4校を維持することは難しいため、4校をこのまま維持するのではなく、再編整備を行っていく。そこから魅力づくりをしていくといったことについて合意されております。

なお統合の対象校については、次回引き続き審議するということになっております。また単独校として維持していけるかどうか、一番懸念されている白馬高校につきまして、今後の在り方や、その魅力づくりについても話し合っております。

以上が他の推進委員会の様子でございます。

以下、高校教育課三澤教育支援主事より資料説明 【説明内容省略】

(中村委員長)

はい、ありがとうございました。

それでは他地区の、東信、南信、中信の様子、それから今の資料の説明について、ご質問等ありましたら、まず初めにお伺いします。

よろしいでしょうか。それでは交通手段については、また議論の中でお願いしたいと思います。

それでは、各団体、地区で何か情報がありましたら、お知らせいただきたいと思います。委員の皆さん、情報がありましたらお知らせいただきたいと思います。

(若麻績委員)

おはようございます。

去る3日に、長野市PTA連合会が主催しまして、長野市長、また教育長はじめ、教育委員会の皆さまとの懇談会がございました。その懇談会の中で協議議題として、高校改革プランにかかわる件ということで、市P連からの提案がございまして、それについておのおのからのご返答をちょうだいしました。そのことについて、ご報告をさせていただきたいと思います。

まず、改革プランについての市教委としてのお考えということに対するお答えでしたが、ひとつは川中島地域については人口等の増が見込まれており、その関連事項として南高校に関する今回の件には、疑問を感じざるを得ないというお答えでございました。

それから鷺澤市長さんも、この件についてのお答えがありまして、鷺澤市長さんのそのときの答弁としましては、やはり高校そのものの募集状況が大きな判断材料となるだろうということが一点目、二点目につきましては今回の改革プランの中では、そういった転換、統合、新設ということに関して、募集状況等勘案して数年間で状況を見ていくべきではないかということが二つ目でございました。

三点目としましては、統合、新設があった場合に、バス通学の便宜を強化していくことが大変重要になるであろうと、そういうことが三点目でありました。大きくは、市教委さんと市長さんからの今のような点でございましたので、ご報告をさせていただきます。

(中村委員長)

はい、ありがとうございます。

ほかにございますでしょうか。

なければ、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、議事に入りたいと思います。

前回の続きということですので、中条高校と犀峽高校の統合の話題だったと思います。犀峽高校に通えるのかということで、調べていただいたバスの時刻表を見ますと、長野バスターミナルから45分ですので、それにプラス自宅からの時間があるかと思いますが、市内から、あるいは今ある交通機関を使って市内から通うことが可能ではないかと思います。

それから高府というところが中条になるんでしょうか。中心部分だと思いますが、そこから犀峽へは笹平経由で現状では47分、バスの接続がありますので少しプラスされると思いますが、手段がないわけではないということ。

中条の中心部分から犀峽へ、別のルートがございまして。バスは通れると思うんですが、通常のバスは、コミュニティバスも含めては運行はされていないと思います。この交通手段について、何かご意見がありましたら。

前回の流れで言いますと、犀峽、中条、両高校とも、現状のままでいいんではないかというのは、皆さん一致したご意見だと思います。その中で統合した場合の交通の便、それから両校の歴史等紹介していただいたわけですが、中条高校の同窓会さんのほうからは、長野市内の高校の分校あるいはジョイント校とする、長野市内の高校の分校化をするというご意見をいただいていたと思うんですが、この辺に関してはいかがでしょうか。

( 森野副委員長 )

前回もお願いしたような気がします、少子化の波は、これは避けて通れないと思います。従いまして、中条さんでお出しいただいている分校あるいはジョイントという線で最小限進められないのかどうかということです。

今、交通手段、犀峡のものが出ていますが、ちょっとこれは別問題でして、中条からは無理だということはもう、地形的に判断できることだと思います。そんな意味で、とにかく中条高校が高校としての存在がなくなるということは、地域の衰退といえますか、あるいは地域の振興のために非常にマイナスではないかと思うわけです。

そんな意味で、ジョイントあるいは分校という線でお願したいなと思っています。

( 中村委員長 )

今、ご意見をいただきましたが、ジョイントに関しては、かなり近い学校でないと難しいんではないかという話があったと思いますが、その辺はいかがですか。

( 丸山委員 )

ちょっと蒸し返すようですが、この前のときにお配りした資料も含めてお話ししたいのです。3区だけで限定しても、ある程度候補案では3区、4区も、あるいは2区も含めてですか、上田も含めてといくというのは大きな1つと考えられるといえ、そうだと思いますが、一応3区だけで考えてみて、私がこの前お配りしたプリントがちょっと間違っていて、皐月は160人4学級の総合学科ということを考えているようですので、私の資料では6になっていますが、皐月が4ということになりますし、北部も2か3ということになりますね。

そうすると実は、19年度は県の計算で49学級が必要です。第3区がね。ずっと見ていくと49、48、それから26年度は50、27年度は50、それでいきますと、30年度まで49。平成30年度まで49学級です。それで、31年度に44学級になるんですね。31年度を基準にして44になるというようなことを基準に計算はしていますが、そのように考えていくと、3区でも学校は減らす必要はないのです。

つまり減らしてしまうと、中条をなくしただけでも、8学級、7学級が幾つも出ます。それが10年ぐらい続くということになります。そういう計算になります。つまり、5.5という数字で割って、単純に5校、6校減らすという言い方の中で、どこかを減らさなければということで話が出ていますが、3区も10年間ぐらいは、31年のところになるまで、30年までは学校を減らす必要はないのです。

減らしてしまえば、7学級か8学級になる。しかも中条を減らしたとしても2学級です。2学級減らしても、さほど影響がないわけで、それと議論の焦点は何かというと、小規模校が活力がなくなるので一定の規模を確保するという考え方が県から出ており、それは一定程度理解できます。

そうすると犀峡が、統合すれば少し大きくなると、そういう見通しがあるかというのは1つの問題だと思います。これは先ほども出てるように、中条から犀峡へはあまり行かないと思うんです。確かにバスの資料をみると見るとこうですけど、やっぱり意識としたら犀峡へ乗り換えていくより、みんな長野へ行くということが、この前から出ているわ

けですね。

統合したとしても、犀峽が大幅に増えるということはないのです。だから犀峽は小規模校で残すとしても、結局もうひとつの議論は、今度は中条の地域から、中条、その周辺の地域から出ている意見、つまりその学校が、ああいう過疎の地域から学校がなくなるといふ大変さというか、深刻さというか、そういうことを考えたら、何らかの形でやっぱり残すという。しかも中条のこの意見から言いますと、中条村から出た意見で、高府からのバス路線に出るまでの生徒は大変だと。

私も中条村にいたことはありますが、結局過疎の中だから、みんなバス路線のほうに転住しちゃうような状況になっていて、それがさらに過疎を加速しているわけです。

正直に、長野や篠ノ井方面に行きにくい生徒や、あるいはやっぱり地元で小さい学校でもいいから、地元で勉強したいという生徒については、少数でも何らかの形で中条高校を残すというのが、教育という観点で中心に考えたら非常に大事なことだと思います。

この前言いましたが、そうじゃないとみんな都市部しか高校がなくなってしまう。そういう点はしっかりと押さえる必要がある。その2つの点ですね。つまり、中条をなくすことによって、ほかの学校の規模が維持できるというメリットはないということです。ひとつはね。それからもうひとつはやっぱり、村の活性化というか、村の過疎の中での要望として、何か文化の中心として学校を残したいという、そういう要望を生かすとしたら、何らかの形でやっぱり残していくということが必要だと思います。

（中村委員長）

ただ今のご意見についていかがでしょうか。

（中沢委員）

ちょっと視点が違いますが、この間長野へ来た帰りに、中条高校の周辺と犀峽高校の周辺を勉強してまいりました。もともとあちらの地域は、土地勘のあるほうですが、現在どうだろうなという感じで見てきましたが、その場合になかなかアクセスの問題等は大変だなということ。

また地域の中でいろいろ少子化が進んでいるという中で、いろいろ生徒を確保することも大変だなと。そうかといって、分校ということはいったいどういうふうにつながるんだというような問題もあります。

そういう思いの中で、今まで福祉などを中心に、中学校や小学校あるいは高校とのつながりの多く、頑張っているところだなと。また歴史的にもすばらしい高校だなという観点から考えて、この高校同志のつながりということも大事だが、中学校と高校が共に連携していくことはどうなんだろうかと。

地域の高校がなくなるといふことは大変なことで、そしてまたそれによってその地域の人たちがより都市へ流動してしまう。それがまた活性化を阻害する要因にもなってくるといふことになる。その例えは中条だったら中条のすぐそばに、中条中学もあるじゃないかと。そうするとそこと2つが、一体となって教員の問題、あるいは管理の問題等考えれば、新しい方向だって出たていいのではと思ったわけでございます。

インターネットで調べてみても、他の県でもそんな向きの中学校と、早く言えば市町村

の中学と県が連携してやっているという例もあるもので、その辺の考え方をちょっと教育委員会で、どのように見ているのか、その辺をお伺いしたいと思うんですが。

（中村委員長）

事務局、お願いいたします。

（柳澤教育主幹）

はい。中高の連携というお話が今ございましたが、この検討委員会から出されております最終報告書の中にも、中高連携について触れられております。中高一貫教育には3つのパターンがございます。

中高連携型、それから設置者が同じ併設型、それから中等教育学校、6年間一貫の学校、こういった3種類がございますけれども、最終報告書の中ではこの連携型の中高一貫というようなことが提言されております。

全国のお話が今ございましたけれども、今年度までに全国では173校、公私、国公立合わせましてできておりますが、公立の場合で見ますと全国で120校できております。その中で一番数が多いのが連携型ということになっておりますが、120のうちの74校が連携型。併設が38校、中等教育学校が8校というような内訳になっております。

この中高の連携というのはいろいろな形で進んできております。連携型の場合ですと入試が簡便になるとか、そういったことはございますが、それぞれの地域におきまして、研究が進んでいるところもございますので、今後の検討課題だと考えております。

（森野副委員長）

今の連携という立場で考えていきますと、すでに中条の場合は幼稚園から小学校、中学と連携しているんですね。と言いますのは、割と村へ入りますと保育園という形で幼児教育をされているわけです。

中条の場合は幼稚園なんですね。都市型ですよ。それで幼稚園の園長と小学校の校長は、兼務です。そういうようなことから考えていきますと、中条は非常に前向きな姿勢で子どももの教育に取り組んでいるということが言えると思います。

それでまた、各行事ですね。運動会だとか文化祭、このときもやっぱり幼稚園の子どもだとか、同じ敷地内に併設されておりますので、小学校の行事にも参加されるということなんですね。

ですからもう、運動会も連携するようです。各行事、文化祭だとかね。そんなようなときにも、連携をしていくと。もちろん少人数でありますから、運動会なんかを小学校だけでは種目数が少なくなってしまうんですね。そこへ幼稚園の子どもも参加していくとか、あるいは地域ぐるみで参加するというような形を取っております。

従って、小中の場合もそうですね。お互いに行事などは参加し合っているというような中で、高校の場合もやはりね。ですから幼保中高、可能なんですね。

というようなことで、ですから幼児教育からもうすでに学校教育的な立場で一体となっておりますので、進めやすい地域かなと、そのように私は見ているわけでありまして。先ほど高府というのを言っている人がありましたが、これは小川村になりますね。

ですから飛んでいるわけです。そうしますと小川の子どもが、今度は中条がなくなりま  
すと、さてかなり遠距離通学、長野へ出ていくということになってしまいます。七二会の  
子どももそうですよね。中条へ通っているわけです。

そのようにしてみますと、やはり中条が地形的にはこの地域の拠点ではないかと考えて  
おります。

（中村委員長）

はい、今、中高連携からさらに幼稚園までということ、ご説明ありましたが、結局縦に  
上がってくるだけでは、一定規模を確保するとか、あるいは教員を確保するとか、それか  
ら生徒の関心、中学生も高校生もかなり部活動というようなものに関心が高いものですが、  
そういうものに対しても充実をさせるのがなかなか難しいという、その点はいかがですか。

とにかく、人に来ていただかないといけないという点がありますね。あるいは候補案の  
ように犀峡との統合ということで、基本的にはそこで増やすという考え方ですかね。そう  
すると今度はまた、通いにくいという面も出てくると思うんですが、その辺いかがでしょ  
うか。

（小山（壽）委員）

なかなか、難しいところだと思いますが、地域の高等学校にとって中学校、さらには小  
学校と連携をしていくということは、この改革プランにかかわらず、今重要な課題になっ  
てきていると、そんなふうには思っております。

ただ前回にも申し上げましたが、中条中学の卒業生 22 人のうち、4 人しか中条高校に入  
学していない、そういう状況があると。小川にしても、12 人のうち 5 人という状況であり  
ます。

だからこの前NHKの高校再編整備の特別番組がありまして見ましたが、やはり 1 人の  
子が、なかなか通いづらいというようなことを申しいていたのを見ました。個別の問題が、  
当然出て来るであろうと思いますが、個別の問題については個別の対応を県のほうで考え  
ていただくということは、必要であろうと思っております。

ただ県下全体の高等学校の適正配置ということで考えていくなれば、やはり小規模な学  
校、そして「ひとりも」というわけにはいかないにしても、おおよそ通える範囲の中に高  
等学校があるというような場合については、やはり統合を進めていくということも、一方  
においては必要ではないかと思っております。

中条の子どもたちは犀峡に行くのかということ、実態からいって現在もほとんど行ってい  
ないわけですから、難しい状況はあるだろうと思っております。逆に中条へ、長野市内か  
ら 21 名行っておりますよね。2 区から 1 名、第 4 区から 3 名ということで 25 名、言っ  
てみれば地元外の生徒が中条高校へ通っているという状況である。

そうすると当然この子たちが、長野市内の高校へ通えるようになれば、何とか決着がつ  
くだろうし、また逆にこの子たちがひょっとすると犀峡高校まで上がるということも、バ  
ス路線の状況から言えば、上がることもあり得る。このように思っています。

(宮本委員)

中学校で、今、進路の大詰めを迎えていまして、子どもたちに進路、どこの高校へ行くかという話も少しずつ出てきているわけですが、やはり私の中学校でも地元の学校へ行くというのではなくて、自分のやりたいことや、特徴ある学校が幾つか県下にありますので、遠くに行くというように、あるいは下宿するというような形で、やはり子どもたちのニーズや目標などがどんどん広がっていますので、例えば犀峽や中条の子どもたちにとっても、やはり部活がやりたいということで、長野市や多くの都会というか大都市の方向に行くということも、本人たちの希望というようなこともあると思います。

先ほども出ていますが、募集定員や希望の数や、あるいは連携ということについても、中学生か、これから入る子どもたちがやはり魅力を感じて、行きたいというようなことがなければ、やはり難しいのではないかなと思います。

たとえ小規模でも残したとしても、やはり魅力がない限りは、中学生が勉強についてもやはり遠くから通っても、自分はそこで高校生活を送りたいという魅力がない限り、存続というのは難しくなってくるのではないかなと思います。

(森野副委員長)

ひとつ事務局にお聞きしたいのですが、以前に何か3年間募集定員に達しない場合は廃校になっています、そのような制度がなかったでしょうか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(柳澤教育主幹)

はい。平成10年に「高校教育の改善、充実」というのが検討され出された経緯がございますが、その中で今お話がございましたような、募集定員の半分に満たなかったのが3年続いたらとか、そういった基準を設けてはございましたが、その基準に基づいての実質的な統合とか、統廃合といったことは起こってこなかったという経緯がございます。

それを今回、この高等学校改革プランで見直していくといいますが、新たに今後の高校再編成のルール、基準と、こういったことを考えてきたということでございます。

(森野副委員長)

そうすると、そういったものをまた踏襲するということでしょうか。それで検討すると。

(吉江高校教育課長)

その関係で申し上げますと、平成10年の改善充実について自体が機能しなかった内容であったという反省点に基づいて動いております。と申しますのが、当時は3学級募集から2学級募集になるということが、例えばその地域においては、その制度を投入しますと大きな問題になりますので、ぜひ3学級募集をしたいという大きな要望が出たりとか、あるいは2学級を1学級にしちゃうと困るから、ぜひ1学級にならないようにしてほしいというような要望が、現実から懸け離れた形で出てきた経過がございました。



それがありまして、結果的には極論を言いますとまたあの制度を適用するとなると、県教委が主導的にどんどん学級を減らすことによって、結果として統合というような事態にもなりかねない要素もあったわけなんです。

それがありますので、今回はその内容が私どもにしますと、検討委員会の最終報告には、例えば下限規模としての2学級というような位置付けも含めて、ある程度は踏襲されておりますが、そこでのやり方自体をそのまま踏襲しているという内容ではないということでご理解いただきたいと思います。

( 森野副委員長 )

ありがとうございました。

( 中村委員長 )

そうすることで、推進委員会の議論が最初、システムとしての魅力づくりでということであったと思いますけど、人を集めなければいけないということだと思います。

今、中高一貫について少しご議論をいただいたんですが、やはり生徒に集まってもらう必要がある。集まってもらうというのは、ある程度魅力づくりと、もうひとつはシステムとして集める必要があるということだと思うんですけど、地域からは分校化ということも挙げられております。

これは私はちょっとイメージがわからないんですが、分校というのは、校舎を残しておいてそこに生徒がいるわけですね。それで本校があるという、そういうイメージだとすると、小さな規模で少ない人数が残っていると、そういうことだけと考えてよろしいのでしょうか。

教育上は、先生方が両方へ通うということになるのでしょうか。お願いします。

( 吉江高校教育課長 )

分校という形になると、今、委員長さんがおっしゃったような形だろうと思います。それで方向とすれば全国的には、実は長野県は分校というのは基本的にございません。たまたま分校という言い方をしておりますのが、定時制における長野吉田高校の戸隠分校、これが1点ございますが、あとは全日制の場合には高校がなく、全国的には離島等における分校というようなもの自体を統合という方向になっております。

それを考えた場合に、私どもは基本的に分校というような位置付けでものを考えていないというのが一点です。

それとさらに分校ということになりますと、本校の定数の中で教員を配置するというような形になります。ですから当然ながら、基本的に私ども県の場合には実は、全日制の分校がないものですから、分校に対しての教員のやりくりとか、そういうことについての知識が実例として掌握していないという点があることをお許しいただいた上で申し上げますと、その中では例えば分校にじゅうぶんな教員を配置するということは、当然ながらできなくなってしまいうような問題に突き当たってしまうかと考えています。

(中村委員長)

はい、ありがとうございました。

多分分校で、今のご説明だと「制度上は」ということですが、分校のほうにも少し教員を多く配置して、本校のほうでその影響を吸収するというような工夫をするしかないのかなと。

そうすると単純に今の現状から生徒の数が変わらなかったとしても、一定規模の確保とか教育の充実というのは、それほど魅力が増すわけではないと思います。分校化というのが、ほかに何かアイデアがあれば別ですが、検討外になるのかなと思います。

ほかに何かございますでしょうか。ジョイントも難しい、分校もそれほど改善にはならないということですが、長野市内校との統合というようなご意見もあったと思うんですが、それはまた統合するほうの学校の課題もあるでしょうし。統合というのは。

そうですね、市内で比較的歴史や何かで近い関係にある。あるいは交通の便で考えるんでしょうか。この辺何か、皆さんご意見があれば、長野市内の高校との統合という、確かそういうご意見もあったと思うんですが。

(丸山委員)

今のことに答えられるかわかりませんが、一部繰り返しになったりしますが、中条の問題は、全県で今統廃合が行われている基本的な考え方は、それに賛成、反対は別として、基本的な考え方は一定規模を維持しないと、教育力が落ちる、活力が落ちるということですよ。

だから統合によって一定の規模が確保できるというメリットがなければ意味がないと思います。例えば中野地区なんかはまさにそれで、統合することによって一定の規模が確保できるということで、そういう提案になっているわけです。

ところが中条の場合は、中条と犀峡を統廃合しても、それによって一定の規模を確保、ほかの学校が一定規模を確保できるということは、ほとんどないと思うんですよ。

確かに今、小山先生がおっしゃったように、中条に行っている長野市内の子たちが犀峡に行くという可能性は多少あるでしょう。でも、これも全部が行くとは私は思いません。つまり犀峡はかなり遠いのです。確かにバスで行くということですけどね。

だから犀峡と中条を統合した結果、統合高校が一定規模を確保することはないのです。つまり2学級なんですよ、やっぱり。地域高校で必要なことは2学級を確保しながらという原則があるわけで、やっぱり2学級規模なんですよ。

ではその中条がなくなったら、なくなった分、市内校が増えるかといったら、もともと人数がいないんですから、そんなに大して増えませんよ。しかも私が言っているように、さっきから数字を言っていますが、この数字、県教委の試算でいくと、平成30年まではつまり犀峡、例えば中条も入れてですよ。中条、犀峡、北部を2学級にして、皐月は4学級と言っているわけだから、あと現在の規模、今、現在の規模の学級プラス1、2ぐらいのところで持っていけるわけですよ。

だから中条自身を減らすことは、減らすかどうかというのが中条の学校がなくなるという問題について、どうするかという問題は、結局一番はそういうふうにした場合に、なかなか行き場がない、なかなか行くのが大変だということが少数かもしれないが、そういう

子をどうするかという問題がひとつですよ。

それからもうひとつは、地域で望んでいるということはどう考えるかということです。だから統廃合のメリットではないんですよ、中条を考える上では。つまり中条高校と村や地域との関係ですね。そのためにはやっぱり、さっき分校はダメだというような言い方をしたけど、教員配置等考えると、分校は確かに難しいかもしれません。

しかし、それはそれなりに残すという原点に立ったら、それは一定の配慮をしなければいけないことであって、そういう意味で何か手はないかということ。私も具体的にどうかということはないのですが、やっぱり中条はまったく高校をなくしてしまうということは、そういう意味ではまったくなくすことによるメリットはない。

メリットという言い方はおかしいですが、ほかに与える、例えばほかのところの規模が維持できるとか、そういうことはないわけで、中条独自のことを考えるべきで、私はだからそのことで考えると、やっぱり分校というようなことを含めれば、何かやっぱり学校という形を残す形と取ったほうがいいのかと思います。

(小山(壽)委員)

今の丸山委員さんのご意見というのはもっともな部分があるんですが、ちょっとやや一面的な感じがするんですよ。一定の規模を持っていたほうが、高等学校教育は比較的良好の教育を提供できるということは、これまで議論をずっとしてきたことで、従って一定の規模が実現できるように統合していこうというようなことが、ひとつあるわけですね。

それからもうひとつは、やっぱり財政上の問題がある。財政上の問題とは、当然限られたお金を、どのように効率的に投下していくのかということだと思うんです。長野県は当然山間地がありますので、すべての山間地の高等学校を、生徒が集まらないからといって、すべてこれを廃止していくということについては、当然これはまずいことであるということになるだろうと思うんです。

従って今回も、この地区について言うならば、犀峽も決してそんなにたくさん集まっているわけではない。しかしより遠い犀峽については、何とか存続をさせていこうではないかと。またさらに他の通学区についても、同様に通えなくなる子どもがいるような地域については、やはり同じような考え方で高校を残していくべきではないかというのが、一方においてはあるわけで、規模が維持できないから、じゃあこれをつぶすということではない。

ただし限られた財源の中で、そのお金をどうやって効率的に使うのかというふうな観点から言えば、どこにでもすべてお金を出していくべきであるということが、必ずしも言えないのではないかな。

中条村にとって、中条高校というのは大変な財産である。しかも地域の方々が、これまで非常に心を込め、また実際のお金も投入しながら育ててきたということは、じゅうぶん尊重するとしても、これをこの学校を維持することによって、相当のお金が支出があるだろう。ならば今の状況からするならば、そのお金は別の学校に投下するということも、じゅうぶん考え得るのではないかと思います。

前回といいますか、以前その統合をしていくことによって23億円の経費が、ほとんど人件費だと思うんですが、それが削減されるというようなお話があったんですが、この削減

された 23 億円がどうなるのか、これがすべてと言わないまでも、かなりが教育に、また再投下されるということであるならば、長野県全体の高等学校の教育力を、そういうお金によって高めていくことができるのではないかと、そんなふうに思っております。

従って、この適正配置というのは、単に規模の維持というだけの問題ではないののではないかと思っております。規模の維持が、一方において必要であるということを意味しながら、そんなふうに考えております。

（中村委員長）

はい。先ほど小山（壽）委員が、個別のことは個別に対応という意見をいただいていますし、長野市長さんも犀峽高校への村営のバス、旧村営のバスをそのまま引き継がれたんだと思うんですけど、市営として運行されています。

それから若麻績委員の報告のところであった、市長さんは、バスを考えていくということをおっしゃっていましたので、中条が合併でと、そういうことは私は言っているのではありませんけど、やはりそういったところに多少お金を掛けていくという点も必要かなと思います。

バスの運行あるいは寮も魅力的なのかなと思いますが、寮やアパート、そういったことで対処していく。もちろん地域から学校がなくなって人が出ていってしまうということも、心配しなければいけないことなんですけれども、また戻ってきていただけるということも考えたほうがいいのかというふうに思っています。

高校は、勉強するところはどこでもできる、より魅力があるところで充実した教育を受けられるのではないかなと思います。

何か、ほかにご意見はございますでしょうか。なかなか結論をここでスパッと言うのも、皆さんも大変でしょうし、私も言いにくいところがありまして、ご意見をお聞きしながら、そろそろ報告書のことと考えながらということで、ご意見を聞いていっているわけです。

冒頭で言い忘れましたけれど、皆さん方のスケジュールを見てみましたところ、12 月はどうも 3 回やれそうだという事務局の判断です。そのため私も 3 回お願いしたいなというふうに思っています。

県議会では 1 月の初中旬といいますが、そのくらいまでに報告という言葉が出ていますので、それを目指してまとめていきたいと思っておりますので、限られて時間でございますけど、充実した内容で議論をしていただきたいと思います。

何かこの犀峽、中条に関して、何か他の観点でございますでしょうか。

（宮本委員）

先ほども発言しましたが、私としてはこの改革プランの推進委員会の気持ちとしては数合わせとか、財政的なことも大事ですが、やはり生徒が集まるような基本的には魅力ある学校を、高校をつくっていききたいという立場でできるだけ発言したいと思っております。

犀峽と中条の関係のことですが、やはり集まるような学校にしない限り、少なくなっていくのではないかと、という気持ちです。

先ほど分校という話があり、よく私もわからないのですが、分校は県教委の話だと吉田高校の戸隠 1 箇所ということですが、生徒が分校で受験するのか、それとも分校というこ

とが、例えば私も地域の活性化ということを大変心配はしますが、何か例えば授業の一環、長期間校舎を使って特別そのところの夏季講習で、全員がそのところに合宿に行くとか、あるいは授業の幾つかをそちらに持っていくとか、あるいは部活動の合宿所をつくってというような、分校化というのはどこまでいくのかわかりませんが、そのような形でも近くの高校とジョイントというわけではないですが、可能なのかということも考えたりします。

分校についてですが、もし分校として受験するならば、長野市から多くの生徒が行っているわけですし、近くに本校にあるのに、分校に行かなければいけないと何か矛盾した形になったりして、そうじゃないのか、分校の形というのは幾つ取るのか、その辺のところはただ単に、今分校という話が出たり、ジョイントとありましたが、定義的なものがはっきりしないものですから、「分校とは」ということがちょっとわからない点が幾つかありまして、もし可能な形で校舎を生かせるとか、あるいは少しでも地元の人たちに還元できるというか、地元の人たちと一緒に学習できるようないい環境があって、子どもたちが魅力を感じるようなことがあったら考えればいいかなと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。分校に関してはどうしましょう。調べていただけますか。  
では、事務局お願いします。

(篠原教育幹)

現在わかっている範囲で分校というものを申し上げますと、まずひとつ先ほどちょっと出ました教員の定数の問題がございます。定数で言いますと分校は、いわゆる定数の標準法の中で明らかにプラスアルファ、これは付くことになっております。

それから今、入試というお話がありましたが、これはいわゆる運用上非常に柔軟になっています。つまり分校で入試を受けるか、本校で受けるかというのは、これはその学校、あるいは学校を統括する自治体の教育委員会、これが定めることになっております。

それから本校と分校の行き来というところに、今、宮本委員さんのほうからは話があったかと思うんですけども、この行き来も基本的には設置者あるいは、その学校のいわゆる裁量という中で当然できる範囲、つまり教育活動の中でできる範囲でございます。

議論は、今、分校化、本校化、あるいは分校化できるところは分校化というふうな議論になっておりますけれども、基本的には先ほど小山(壽)委員さんが言われましたように、ある一定の規模の中で、どれだけ魅力を出せるかということがポイントであろうと思います。

実際には長野県の戦後の高等学校の歴史でいいますと、いわゆる高等学校、あるいは小中でいいますと、分校がどんどんと廃校になり、本校化されていく。これは、小中でもそうでしたので、高等学校で言いますと、例えば通学距離というふうなものは、かなり簡単に言いますと体力的にもクリアできる、あるいは精神的にもクリアできる、そういう年代になろうというふうに思っております。

それからもう一点寄宿舍という話が先ほど出ていますけれども、寄宿舍を置く学校も実は教員定数で言いますと、実際にはプラスアルファというものがございます。これも例え

ば松本市内あるいは長野市内に、周辺の町村から行く子どもたちのために寄宿舎を持っていたという歴史は、これは実際に長野県でもございます。

その辺をどう考えるかというところは、ある程度議論の余地があると思います。寄宿舎は現在はありませんが、かつてありました。

（中村委員長）

ありがとうございました。

何か別の観点でもよろしいんですが、ご意見ありますでしょうか。

（若麻績委員）

先日、中条高校へ行って、個人的に見て来たのですが、高校と中学校が非常に近い位置に、同じバス道路とかにあって、固まって設置されておりました。高校の敷地もずいぶん、横に広いというか大きな校舎であったような気がします。

これまでのお話の中で、やっぱり今この数字上で言いますと、中条中学校さん自身が22名の卒業生だったということで、今年度どうかということはわかりませんが、例えば中学校と、例えば高校が分校なり何かの形で、その地に残っていた場合、例えば高校の敷地で全部そういう中高一貫が、規模的にできるかどうかという疑問がひとつあります。それは中学でできるのか、高校でできるのか。現状の建物の中で、どんな運用ができるのかということが知りたいところだと思います。

長野市内からの生徒が多く占めている状況の中で、決して魅力ないとは思わないですが、それなりの魅力を持っているからこそ、子どもが集まるわけです。ただし、今後のことを考えた場合、地元の方が、地元の例えば産業で活力を、地元のコミュニティを強くしていこうとか、そういう強いものを持っていくための状況で、今あるのかどうかということを見ると、若干疑問が生じざるを得ないと思っています。

その中で先ほどのような地元の子どもたちが、この学校を使って何とか地元とやりたいんだという気持ちになれるような、例えばそういう教育環境が、この中学か高校でできるのであれば、それも1つの方法かなと思いますが、現実的にその辺が規模的にどうかということをお教えいただければありがたいと思います。

（中村委員長）

はい、事務局、お願いいたします。

（吉江高校教育課長）

今の、校舎を1つだけ使っというとことであれば、規模的にはまったく不可能ではないだろうかなという感触は持っています。実際細かく調べたわけありませんので、一概に直ちにそれがイコールだということは申し上げにくいと思いますが、ただ一点申し上げるとしますと、中条高校の場合には今年度の入学者が41名、それでトータル1年生から3年生までで103名しかいない学校でございます。

分校の議論も若干先ほど来ございましたが、103名ということになりますと、1学年あたりの平均で35名おりません。そんな状況の中で、今後この学校がどうなのか。またさらに

は先ほど連携というお話も出ておりまして、また小山（壽）委員さんのほうからお話がありましたように、現状においてこの学校に、地元の中学から入られる生徒さんが非常に少ないということ、これは現実でございます。

ある意味で、22人で4名でございますので、正直申し上げて20パーセントもいないというような状況であるということも含めて、ご検討いただければと思います。

（清水委員）

今、県教委からお話があったことをお聞きしながら考えていましたが、やはりこの会というのは県立高校再編整備候補案についてという、その資料の一番冒頭にありますように、総数決定基準に基づき27校から21校に再編整備することが必要になると謳ってあるわけです。

27校から21校にするということが決定して進んでいるとは理解しているわけでありませんが、いずれにしても校数を減らさざるを得ないという前提で話が進んできていると、私は思っております。

確かに中条高校、犀峽高校の問題につきましても、どちらの高校も存続していけるのであれば、それに越したことはないですが、もろもろの資料、それから今までの議論の中からも、冒頭にうたっていることを基準に考えれば、減らして行かざるを得ない方向からすれば、当然上がってくる校名ではないかなという理解ができるわけです。

中条高校については、この地域高校というものの存在意義を、私も今考えてみましたが、やはり地域の子たちが基本的には通う学校。それで地域の活性化に寄与していく、そういった期待を持って子どもたちをはぐくむというイメージが、私としてはあるわけなんです。

先ほど県教委からもお話がありましたように、地元の子がその学校へ行っていない。むしろ長野市内からの流入が多いと。さらにもっと言えば、人口減少、または生徒数も減っていく。そういったことからすれば、ちょっとやむを得ないところもあるんじゃないかなという感を持っています。

このことは前回の委員会でも申し上げたことかなと記憶しています。それと分校というお話もありましたが、これはあくまでもイメージで申し上げて申し訳ないですが、分校というイメージというのは、つまりある集落の子たち、一定規模の子どもたちがいるけれども、なかなか都市部のほうに通ってこられない、そういった子たちを救済するという言葉が適切かどうか分かりませんが、そういった子たちの配慮のために分校として設置したといった経緯があると私は思っているのです。

今現在、そういったような状況ではございませんので、この中条高校に関しては分校というのは、何か似つかわしくなく思っています。吉田高校の分校については、これはまた全然違う意味合いを最近では持っていると思っていますが、吉田高校の分校と中条高校の分校化というのは、全然異質のものではないかなと私は思っております。

（坂口委員）

どこがなくなるかという2択の中では、結論は私自身ちょっと出せないわけですが、数字で地元の子どもが22分の4を占めており、長野からかなり生徒が行く。でもこれから少子化等々言えば、これは明らかに学校とすれば非常に厳しい状況かなと思います。

しかし地域の願いとか、あるいは今年本校の中学校の教員が、中高交流の人事を行いまして、この4月から中条高校へ赴任しております。話す機会があってお聞きすれば、どちらかと言えば、さっき中条に魅力があるとかないとか、この辺は非常に難しいところがありますが、そこへ行かざるを得ない生徒も正直いる。本校からも、何名か今まで行っております。

しかし途中でやめたというような子もいますが、その少ない子どもたちに先生方が本気になって、必死になっていく。これは当たり前と言えば、教師の本分でありますので、当たり前ですが、先生方は必死になって子どもたちのために、日々活動を行っている話を聞き、何とか存続していきたい、させたいという、そういう願いを非常に強く持っているようであります。

これはちょっと定かでないのではありますが、特に野球部はもう人数が足りなくて廃部になったと。その教諭は、剣道の力が非常にありますので、同好会かちょっとわかりませんが剣道部をつくったというような、非常に生徒が少なくなっている中で、何とかやりくりをしながら、自分は体育であります但しコンピューターの講座も持って指導していると、そういう実情を聞けば、やはり生徒がいる限り学校は残したいなど。

しかし状況は非常に厳しい。ある文学作品に、「知に働けば角が立つ、情にさおさせば流される、とかく高校改革は難しい」となるのではないかと思います、ではどうすればいいのかというのは、非常に難しい。だから私とすれば、その結論は私自身、ちょっと出せません。

生徒を送り出す中学校現場とすれば、どうすればいいのかなと正直、ますます暗闇に頭を突っ込んでいっているのかなと。ですから数字とか、そういうもので言えば、これはもうなさざるを得ない。あるいは、やはり高校も仕方がないという状況であるんだけど、地域とかそういった思いも大事にするとすれば、大事にしたいなと思います。

どっちに不等号の開いているほうが行くのか、ちょっと私自身は出せない状況であります。感想的なことで、大変申し訳ありません。そういう思いであります。

(丸山委員)

おわかりだと思いますので、はっきり言う必要はないかもしれませんが、あえて言います。地元の生徒が行かないという問題は、そんなに単純な問題じゃない。いろいろな複雑な要素があると思います。単にその学校が魅力がないだけではないのです。

今、私も幾つかの学校を経験し、その学校はほとんど進学校ではありませんので、よく経験しましたが、はっきりちょっと挑発的で申し訳ないですが、親も、生徒も本当に魅力で選んでいるかということです。

例えばこれも挑発的ですが、進学校は魅力ですか。進学が魅力ですよね。そういう問題があるわけですよ。やっぱり学校格差とかいう問題が、かなり大きく響いている問題と、それからもうひとつはやっぱり確かに村全体が、申し訳ないけど村全体が過疎というような状況で、都会へ都会へ、都市部都市部へという動きがある中という問題も影響しているのです。

ただ私はイメージとしては、例えば分校ということでしたら、やっぱり少し前の戸隠分校のイメージはダメなのか。それで中学との連携や、村との連携とか、地域との連携と



かありましたよね。そういうのを、分校的なものにしながら地元と学校で、じゅうぶん努力をしよう。

その結果、その先はまた考えればいいので、というのはさっき私が言ったように、平成30年までは中条を残したとしても、その結果として長野市内の高校が規模が小さくなるということはないんですよ。今の学級、17年度の学級規模を維持しても、まだプラス学級増をしなければいけないぐらいのことになるのです。

だから減らすことによって、ほかの学校の一定規模が確保できるというのは、ほとんどメリットがないわけですよ。そういう点で言ったら、中条の地域がそれだけの熱意が、願いがあるとしたら、そういうのを例えば戸隠分校的な分校として、あるいはほかの方法があるかもしれませんが、そういうことを、この先十数年間は残せる。残せるというか続けられる。

その中で、今出ている中学との連携とか、新しいことをこれから考えていけばいい。ここで私もすぐ、こういうことをやれということを出せませんが、それは何年間もかけて検討すればいい。そういうようなことを、ちょっと考えます。

例えば定時制ということもあり得るんじゃないか。昼間、夜だけじゃなくてね。そういうようなことも含めたことを、もう少し検討する必要があるんじゃないか。ただこれをなくしたから、確かに数として1校がなくなるということで、計算上は検討委員会の最終報告の数は1校、それでオーケーという話になるけれども、これも私は後で言いますが、あの数だってあそこまで減らす必要はない。減らしたら大変なことになるということが前提になりますので、私の中にはね。

そういうことでいったら、やっぱり一定の高校は何らかの形で残す方向はぜひ考えてほしいと思います。

(中村委員長)

残す方法でのアイデアというのを、ここで具体的に議論ができればよろしいのですが、なかなか出てこないというふうに思いますけれども、何かご意見はありますでしょうか。

分校化といったときには、どこの学校との分校化を考えるのかという問題になるうかと思いますが、これは前回もどことの連携か、お尋ねしたんですが具体的には皆さん方からのご意見はなかったように思います。

近くというと篠ノ井とか西高とか工業、近いということであればそうなるうかと思うんですけど、だからといって具体的に分校化をする何か歴史、あるいは何かこれまでの実績のようなものがあるかとか、そういうものが分かりませんが、ただくつつけるというのは、これはいけないと思います。

ご意見がないようであれば、どうしましょうか。なかなか結論までには至らないかと思いますが、どちらかという、やはり一定規模を確保し、社会性や充実した教育を実現していく方向というのが皆さんあるうかと思います。あとは、やはり地域のことを考えると、残さざるを得ないのではないかというご意見だったと思います。

それでは、結論まで出ていませんが、まだ触れていないところ、議論がまだあるうかと思いますが、4区のほうに移りたいと思いますが、そういう進行でよろしいですか。あらためて議論するか、あるいは今のご意見をいただいた状況から、報告書に、どなたが、

どういう文章を書いていくのかというのは、まだ決まっておりませんが、まあまとめていく。またその文面について、ご議論いただくことがあろうかと思いますが。

ご意見がなければ、4 区の議論に移りたいと思いますがよろしいでしょうか。これもぜひ、よく議論しておく必要があるところだと思います。候補案に基づいて進めるのが、一番ご意見いただきやすいというふうに考えますので、まず長野南高校と松代高校の統合が挙がっております。これについて、今までも多少は議論していただいていると思うんですけど、またご意見をいただきたいと思います。

南高と松代高校の統合に関して課題、あるいはそういう方向でいいのか。候補案の文面をもう一度見ていただいて、議論を進めたいと思います。

（丸山委員）

ここの問題は、また後で私がいろいろ調べた数字的なことの説明をしますが、この候補案の中で、私が思うのは、長野南と松代の問題については、今までのいろいろ出てきた問題の中で一番理由がわからない。なんでこの2つを統合するのかという理由が、この説明ではまったくわからないので、なぜ長野南と松代なのかというところを、もう一遍説明してほしい。一番のポイントのところを、県教委が出したところで、お願いしたいと思います。

（中村委員長）

多分繰り返しのご説明をいただくことになろうかと思うんですが、復習の意味でもう一度事務局のほうで、そうですね。候補案の7 ページのところを、もう一度ご説明いただけますでしょうか。

多分事務局のほうに言わせると、どこが理解できないのかわからないとおっしゃるでしょうし、ご関係の方に言わせると、どれが理由なのかわからないとおっしゃるし、なかなか議論がかみ合っていないところだと思いますが。説明の仕方を変えるというのがひとつ。

（市川委員）

私、また先ほど若麻績委員の報告とちょっとダブるところがありますが、私は何点か疑問に感じているので、それで質問をさせていただきたい。

その第一点は、長野南という地域を見たときに、平成 31 年には中学生が 81 から 17 パーセントに減少するという報告をいただいていると思いますが、あの地域を見ますと、オリンピック後非常に道路整備もできているし、今は住宅、あるいは商工業者のところも多くなっているの、私からすると人口が増える可能性があるのではと感じている。その辺をどのようにお考えになっているかというのが、第一点。

それから第二点は、松代にしる、長野南にしる、両校とも志願倍率が今でも 1.0 以上の数字を保っているという点、これについてその辺の統合という問題を、どうとらえているのかということ。

それから第三点は、交通機関の利便性ということも考えておりますが、これは南に利便性と言っているのかどうか、南のほうが利便性が高いのかなというような感じもしないでもないですが、それほど両方問題ないんではないかなという点。

それから第四点が、あそこの地域から他の区でしょうか、3区へ通学するのが非常に多いというふうにお話があると思いますが、この辺については長野南なり、松代の高校の魅力はどうあるべきかという観点になるんじゃないかなというような感じがして、この四点について、ちょっと確認をしたいということです。

(中村委員長)

それでは、7ページの説明も含めて、今の関連でお答えいただければ。もう一度ご説明いただければと思いますが。

事務局、お願いいたします。

(三澤教育支援主事)

はい。第6回の折にお配りしております、再編整備候補案についてという資料でございますが、その7ページになるかと思えます。

まず、生徒数の状況といたしまして、第3区、4区は平成17年4月卒業生数が5,048人であったが、平成31年には4,281人となることが推定され、767人の減少となる。それと高校の数は県立16校、市立1校、私立5校が、長野市、千曲市の高校に生徒が集中し、周辺の高校では下限規模を下回ることが懸念される。

募集学級数、平成17年度89学級であるのに対し、平成31年は75学級となることが推定される。学校を一定規模としていくために、県立全日制を13校程度にしていくことが適切である。

中学校卒業生数の減少は、第3区より第4区のほうが多い。平成17年度と平成31年度の差を比較すると、第3区は2,893人から2,535人となり、360人の減少。これは87.6パーセントであるが、第4区は2,156人から1,749人となり、407人の減少、81.1パーセントとなります。

それと流入入ということ、お書きしているわけですが、区間をまたがる生徒の入学動向になるかと思えます。第3、4区の高校は通学圏域が広く、この地域の生徒は比較的学校の選択肢が広い。第3区と第4区間の流入入は県内で最も多く、平成17年度入学生では第3区から第4区へ262人、4区から3区へは372人の流入入がございます。

同一の通学区域として見ていくこともできる。特に4区から3区への流出人数は、流入人数よりも110人多く、将来的にもこの傾向が続くことが推定できる、ということがございます。

それと入学者の状況といたしまして、資料はここに数値的なものを載せさせていただいておりますが、長野南高校、松代高校とも先ほどありましたように志願倍率自体は1.0倍を超えております。入学者数の募集定員に対しての状況であります。

ただ表に書かれておりましたのを再度ご説明させていただきますと、上のほうの表、これはそれぞれの隣接する中学、広徳中学、更北中学ということがあって挙げてございますが、長野南高校へどのくらいの割合の生徒が行っているかという表でございます。

それと下のほうの表は、松代中学から松代高校へ、どのくらいの生徒が行っているか、上下比べていただく表ということでもあります。それとそれぞれの中学から、ほかの第2区、第3区の高校、それとその他第4区の高校、第5区と続きますが、どのくらいの割合で各

中学から、どういう進学先を選んでいるかという表になってあります。

上のほうの長野南の近接する広徳中学、更北中学では、生徒の中のおよそ動きを見ていただきますと13パーセントです。松代中学のほうで、松代高校、近接する松代高校へ行っているのが22.8パーセントという数字なっているということでもあります。

それと第3区の高校のところを見ていただきますと、上のほうの表では37.1パーセント、それと松代の中学のほうへいきますと、21.1パーセントという数字になっております。

それと8ページをご覧くださいかもしれませんが、これは今度は高校側から見た表であります。長野南高校の入学者の内訳としまして、どこの中学から入学されているかというものを示していますが、広徳中学から全体の12パーセント、更北中学からは8.7パーセント。第3区の中学から25.3パーセント、その他の第4区のエリアの中学から53.9パーセントという値です。

松代高校の入学者の内訳としまして、松代中学から来ているのが21.9パーセント、それと第3区が12.9パーセント、その他第4区のエリアの中学からは65.1パーセントという割合になっているということでもあります。

それと地理的状況といたしまして、長野南高校のある地域は通学圏域が第2区から第5区までと、広域にわたる。進学先となる高校の選択肢が非常に多い。松代高校のある地域は、比較的第4区からの中学校卒業者が入学する割合が多い。

長野南高校は、最寄り駅の今井駅から自転車で約20分、距離的には3.6キロくらいになるのではないかと。そのところに位置し、松代高校は最寄り駅の松代駅から徒歩約20分、約1.6キロのところに位置する。

総括的にということですが、将来的にも第2区や第4区の中学からの流入が多いことが予測される。長野市北部の高校の募集定員を一定に維持し、第4区の中で比較的第3区に近い長野南高校と松代高校を統合する。

統合に際して、交通機関などの利便性を含めた地理的背景を考慮し、長野市南東部の松代高校の校地・校舎を活用していく。

それと再編後のイメージとしまして、松代高校統合後の校舎・校地の候補とすることで、現在の松代高校の地域と連携した教育実績や、普通科コース制、商業科、類型制を生かすことが可能である。統合した高校では、スケールメリットを生かし、長野南高校で実施されている普通科の学校設定科目を多く置いた教育課程や、特に普通科の類型制、特徴あるクラブ活動、こういうものを引き継ぎまして第4区の教育の充実を図っていくことが可能となる。

近隣校の状況としまして、第4区の高校では、現在長野南高校や松代高校を含めて一定の学校規模であるとか将来的な中学校卒業者の減少に対応するために2校を統合し、第4区の中学校卒業者の通学圏域が広範であり、特に第3区の高校への入学が多いことから、生徒数の推移を見ながら長野市内、千曲市内の高校の募集定員を十分確保していく。

坂城高校についてはということで、あと多部制・単位制高校というふうな結びが、一番下にあります。

一応こんな形で、以前ご説明したような経過でございます。長野南、松代の統合にあたりまして、いろいろなところでご意見をいただいているわけでございますが、県立高校としての配置ということで、大通学区として第1通学区、それと旧通学区で1、2、3、4とい

うことになるんですが、その辺の流出入、それと県立高校としての配置ということで、特  
殊的にその部分で人口がということよりも、第1通学区の生徒の皆さんが通える位置、通  
えなくなってしまうことがないようにという観点から、当初は考えたものでございます。  
以上です。

（市川委員）

今のお話はそのとおりでございます。先ほど言ったのは、人口動向が第四区でも地域に  
よって相当変わってくるんじゃないかと思います。

今のご説明の中ではあまり動向についてはというお話かなと思ったのですが、それもち  
よっと考えるべきではないかなと思っているのです。その辺の統計の推移というんですか、  
あの地域をどう見て、この数字が出たかというのを教えていただければありがたい。

（中村委員長）

事務局、お願いします。

（三澤教育支援主事）

はい。今ご説明しました人口の部分ですが、これは各旧通学区単位で計算したものでご  
ざいます。例えば長野市の南部の部分のところの人数ということではなくて、第4区の場合  
は長野市に南部から千曲市まで含まれますので、それを人数として考えております。

そういうことで人口の動向といたしましては、先ほど記載のあったとおり減少をしてい  
ると。これは各旧通学区どこでも、大きく増えていくというような傾向のないところでご  
ざいます。

（中村委員長）

市川委員、よろしいでしょうか。

（吉江高校教育課長）

ちょっとよろしいですか。

（中村委員長）

はい、事務局、お願いします。

（吉江高校教育課長）

県立高校の配置の関係で、ちょっと若干補足させていただきたいと思っておりますが、  
実はとりわけ小学校の場合、小学校の場合に市町村におきまして非常に悩ましい問題が、  
今まさしく市川委員さんからご質問のあった事項でございますが、小学校の場合には、例  
えばどことは申しませんが、ある市内のある地区が人口が急増化しますと、結果的にその  
地域は、いわゆる通学区が小学校の場合には非常に狭まうございます。

長野県下で申し上げますと、小学校の数は400校、中学は200校、それに対して県立高  
校は89校ということで、倍、倍、倍というようなイメージで、逆に考えますと、2分の1

さらに2分の1というような状況になっています。そういうような通学区の状況の中で、市内校の場合に大きく生徒数が急増するような地域は、結果的に大規模校が発生します。

それで大規模校を解消するがために、新たに学校を新設することによりまして、逆に小規模校が出て、その小規模校につきましては、どこは申しませんが、いろいろな市、あるいは町村も含めて、そこについての統合の話も最近ではかなり、私どもの高校改革とは違う意味で、ご提案等議論がされているというのが現状かと思っています。

それに対しまして、先ほどもほかの委員さんからもお話がございましたように、高校生の場合にはむしろこの市、この町、この村よりも違うところに通いたいとか、あるいは長野市の場合で言っても、例えば市内校であっても10キロ以上離れたところに自転車で通われている生徒さんがいるとか、そういうようなことで通学圏域が非常に広いのが現状でございます。

それを考えますと、私どもは従来から基本的にはそれぞれの市町村における生徒さんの、その地区内の状況とか、そういうようなものを考慮しての動きというのは基本的にはしてございません。

またさらに申し上げますと、募集定員の決定にあたりまして、従来からはそれぞれの旧12通学区における全体的な生徒数の数、いわゆる卒業者の数をベースに決めさせていただいております。

そういう意味では確かに市川委員さんからのご提案、ごもっともな面がありまして、また地元のほうからもそういうような議論をちょうだいしておりますが、私どもといたしますと全体としての増減、それとさらには生徒の広範囲な通学と言うことを考えた場合に、ポイント的な議論はしていないというのが現状でということでご承知いただければと思っております。

それともう一点ですが、いわゆる十分な定数を確保しているのではないかというようなお話もございました。これにつきましてはある意味、ある程度の全体的な議論をする中で、極論を言いますと定数に満たないだけの議論をしていきますと、結果としてはある意味生徒が集まらない、小規模校の議論にだけ集約されてしまいます。

それで小規模校の議論にだけ集約されてしまいますと、先ほどの十分いろいろなご意見が出されておりましたような、じゃあ、その地区からなくなると学校に通っている生徒さんはどうなるんだというような議論にも発展してまいります。

ですから私どもといたしますと、どうしてもそれぞれの大きな通学区をまず議論した上で、それぞれの12の旧通学区も含めて考えまして、それでいろいろな候補案の検討を申し上げたという次第だということでご理解いただきたいと思います。

(中村委員長)

市川委員のご質問は、お答えいただいたと思いますがよろしいでしょうか。

(市川委員)

すみません、ありがとうございました。

わからないではないのですが、ちょっとまだ私にも疑問が感じるということで、いわゆる「統合」そのものに対して、私も賛成なので、原則的にはどうこうないんですが、ただ

この具体的に言うと南が松代へ統合するということの、その辺の具体的なことがちょっと私どもに難しい、理解しにくいという、その辺をご説明いただければありがたいなと思います。

（中村委員長）

多分再編後のイメージのところで説明されていることだと思いますが、お願いいたします。

（吉江高校教育課長）

ひとつとしましては、まず地理的な問題につきましてはここに記載している通りでございます。それともう一点、さらに加えさせていただきますと、数字はすぐに出るかと思いますが、実は長野南高校の場合は、ほとんど自転車通学でございます。

確か80数パーセントだから、非常に県内でも自転車通学の多いところということに対して、確かに全県的に自転車を使われているところはあるんですが、ただ全県平均としますと、自転車通学というのは、思ったより多くはございません。

それに対してとりわけ多い、逆に言いますとバス通学と自転車通学がメインの学校であるということに対して、松代は確かに便が必ずしもいいとは申しませんが、それぞれの系統として複数以上の対応手段が確保されているというのがひとつです。

あとは松代の地籍は、ご案内のように結果的には長野市内としますと、それから先が袋小路のような状態になっていることもございまして、こちらのほうへ向かうしか方策は基本的にはないというような面もございます。

それからあとは先ほどの、まさしく候補案にお示しいたしましたように、いわゆるそれぞれの今後の学校の特色づくり、あるいは松代の今配置されている科の状況とかを考えた上で、取りあえず私どもとしますと、どちらの校地校舎を用いるかというようなことの中では、私どもがお示ししましたような候補案にした次第でございます。

それでなお、全県的な数字で申し上げますと、自転車通学は全県平均では38.6パーセントというような状況でございますので、非常に自転車通学が多い学校であるということがご理解いただけるかと思います。

（中村委員長）

ほかに、何かご意見、疑問点等ありましたらお願いします。

（小山（元）委員）

ただ今の吉江課長さんの説明、自分はわかるわけですが、長野南高の校地を行って拝見いたしますと、これはほんとにうらやましいくらい広い校舎なんですよ。第3区の長野市内の高校に比べますと、これはほんとに狭いと。そのまま引っ越してもいいくらいの、すばらしいあれだけの校地で、ほんとに生徒諸君が伸び伸びといろいろな活動をしているのが、生き生きした姿を見せてもらおうと、これはやっぱりこういうところは、高校生が伸び伸びと学習して、いろいろ部活でやるには最適な場所じゃないかなと思うわけです。

県教委の説明はわかりますが、しかし今の市川委員さんと同じように、長野南と松代という、川を挟んでの向こうとこっちの統合ということ、広い範囲ですが。更北・川中島地区は、市川委員さんも発言されましたが、長野オリンピック開催後非常に道路整備が進んでおりまして、現在もどんどん新しい地区で道路整備して、特に住宅造成が今盛んになっておりまして、やはり今後非常に人口増加の傾向も見られると。そういうことを一番感じるわけです。

やはり流出、流出というお話もございましたが、高校の種類ですね。工業課程、工業科、それから商業の関係につきましても松代にも商業科がございますが、長野に商業高校と、そういういろいろ高校の配置によって、中学の諸君の希望するところから、そちらのほうへ動かざるを、その地区のほうへ行かなければいけないという、ひとつの方向もあるかと思うんですよ。

そういうことも、地区の方々の様子をお聞きしますと、いろいろな面で聞こえてくるわけですし、ここであの大きな長野南高、ほんとにまだできて22年目ですか。やっと学校のひとつのものをつくり上げてきたところで、「はい、そこでまた統合」というのは、地域の人たちはほんとに期待感を持ってつくり上げてきた高校を、これで大丈夫なのかなと。今後、やはり県の高校に対する地域のイメージダウンですね。われわれ地域で支えて高校をつくり上げていくという気構えというのは、長野県どこでもあると思うんですよ。

そういうところを今後、これで見えていった場合に、あとその地域の方々にどういうものをはたして残すべきであるかということ、大事に考えていかないということ。単なる数でこうだと。生徒数の減少、人口の関係、そういうところだけでやって、はたしていいかどうか。

当時この長野南高と松代高の統合については、私自身もちょっといろいろ疑問を持っておりましたので、そのようなことを申し上げたいと思います。

(中村委員長)

いったん休憩を挟みたいと思います。

【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは再開させていただきます。若麻績委員が、所用によりご退席されております。ご承知おきください。

それでは引き続き先ほどの件で、南高、松代高校の統合ということで、ご意見をいただきたいと思います。

(清水委員)

この長野南高校と松代高校のことにつきましては、先ほど市川委員さん、それから小山委員さんがおっしゃられたように、私もまったくなぜなのかなというのが、この文面を見ても、まだちょっと納得がいけない部分が多いわけで、一点お聞きしたいと思うのは、特に長野南高等学校、昭和58年に設立されたということですが、その経緯というのを、ちょ



っとおわかりになる範囲内でお聞かせ願いたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

お答えいたします。

まずは大前提を申し上げたいと思いますが、基本的に昭和のとりわけ 55、56 年から、以前からお配りしております表にございますように、全国的、また県下におきましても、大きな生徒急増期を迎えておりました。とりわけこの傾向というのは、昭和の 45 年代ぐらいから、表現はよくないのですが生まれ年の関係で多い年とか少ない年というような変化はありましたが、それをさておいて考えますと基本的には昭和の 40 年代後半からずっと上昇状況にありました。

それでそれを受けまして、私ども教育委員会としては基本的に、学校数を増やす方向で昭和 50 年代の前半から動いておりまして、その前半からの動きの中の生徒急増期における対策という点が一点でございます。

それともうひとつとしましては、当然ながら人口等やご要望等もあったりというような要素があった上で、最終的にこちらの地域ということで建設したというような形態でございます。

(中村委員長)

清水委員、よろしいでしょうか。

(清水委員)

はい、ありがとうございます。

お話はわかりましたが、それではなぜこの地域に学校をつくったかという点についても、付け加えてご説明いただきたいと思います。

(中村委員長)

現在位置にということですか。その辺の経緯がおわかりでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今申し上げた状況の中で、それぞれの地域ごとにご要望等もあったことは事実です。当然ながらこの地域に欲しいとか、欲しくないということは、当然生徒急増期においては起こることです。

例えば先ほど申し上げましたように、中学校、小学校の場合にも生徒が増えてまいりますと、どこかの学校が分けて欲しいとかというような話の地区が出てくるというようなことがございますので、そんな経過の中であそこには当時から校地としましても、今現在健康づくり財団などがありますような、恵まれた土地柄というようなこともありまして、そんなことでこの地域に建設してはというご要望の中で、先ほど申し上げました全体的な生徒

数の上昇に対応するというような面も含めまして、建設されたというようなことです。

それで、もしこれ以上の詳細なことがというようなことであれば、次回にあらためまして経過については詳細なものをお出ししたいと思います。

（中村委員長）

はい。清水委員、よろしいでしょうか。

（清水委員）

ひとつには、生徒急増期であったと。これは全国的なものだと思いますが、私が2番目にお聞きした「なぜ、ここに」ということが、私は一番心配だったことですので、今のご説明ですと、「要望が強かったから」ということで、それが一番の理由だと解釈してよろしいでしょうか。

（中村委員長）

清水委員のご質問は、現在地ですね。自転車通学が非常に多いような地域。長野市の南部といっても、まだたくさん候補地があると思うんですが、「あそこになぜ」という、そこが一番お知りになりたいと思いますので、事務局お願いします。

（吉江高校教育課長）

そうということで、詳細はあらためてお出ししたいと思います。県教育委員会のスタンスでまいりますと、長野市内は旧通学区制の中では2つに分かれておりました。それでこの地域というのは、第4通学区という位置付けに当時なっておりましたので、第3通学区の状況、第4通学区全般の生徒数の上昇状況等、そこら辺も勘案した上で、その上で策定してきたという経過があるかと考えています。

ただしかながら、詳細のことにつきましては、本日持ち合わせておりませんので、あらためまして経過につきましてはご報告したいと思います。

（中村委員長）

よろしくお願いいたします。

ほかにございますでしょうか。

（丸山委員）

私もこの地域、長野南と松代の統廃合の問題は、これはやめるべきだと思っています。先ほど、文章を読みながらの説明がありましたが、これははっきり申し上げますと長野南と松代になった場合の説明にすぎない。先ほど何人かの委員さんから出ているように、必要があって地域の要望があり、要望だけじゃなくて、それは当然そこに造るべき必要があって県は判断をされて造ったわけですね。要望があれば、どこにも造るわけではない。

そういう点でいくと、造ったときの、そういう点でこれは急増期のときの新設校なわけですから、そのときと状況は大きく変わっているのかと。廃止するような状況変化があるのかという点は、非常に大きいと思いますね。

それは今までも幾つかの委員さんから出ているように、人口の状況からして減ってきて、規模は小さくなってきて、もうもたないということではないわけですよ。それがひとつですね。

それからもうひとつ、その理由の中に、長野市の北部へ流れているという問題も先ほど何人かの委員さんからありましたが、やっぱり流れる理由があるわけですよ。それは先ほどありましたね、商業科、工業科とか、そういう種類ですね。学校の種類による配置で、そっちへ行きたい子は当然そっちへ流れていくということもあるし、私は中条のときにいったことと同じことです。学校格差があるんです。

バリバリ進学に進学校は、当然進学校に行くわけですよ。そういう流れも出るわけですよ。だから今、どうしても学区が広域になっていますから、そうするとそういうことも当然出てくるわけですよ。しかもパーセント条項で、前の大学区じゃない場合でも、12通学区でもパーセント条項で動いているわけですから、そういう点でいくと学校の格差の問題。それから学校の配置の問題、流れるのも、それは流れるべくして流れているわけですよ。

だからそれをもっと助長するのかわかっていう問題がある。これは、もっとそれを大きくしていくという話ですよ、これをやるとね。百歩譲って、今の現状で止めておくならばまだわかりますが、これをやると、それをさらに助長していくということになるわけです。それがほんとにいいのかということがあるわけです。

それからこれは数字的なことをちょっと言いたいんですが、この前のときに私が配った資料を、また見ていただきたいのですが、坂城の問題も含めて考えると、坂城と長野南がなくなるということになると、この4区は8学級、9学級が10年間以上続きますよ。それでいいのかって問題があるわけですね。

それは多分県が言うには、北部に流れるからいいよと言うかもしれませんが。でも、北部だってさっきも言いました中条の問題で。これも7学級が出てくるわけですよ。つまり現状の学級より増えるわけですよ。どこもね。増えるわけです。3区も、4区も。

そういう点でいけば、この地区はやっぱり学校を減らすべきじゃないと私は思います。では、その数の問題がありますね。5校減らせていっているじゃないかいという話がありますが、この5校というのもまったく合理的な根拠がないですよ。私は計算したんですよ。こういう計算をしてみたんですよ。

さっきの説明の中に、31年で75学級というのがあります。それをただ5.5で割ると13.6になります。だから13校というのとは3、4区についてはいいと。しかし13校程度がいいと言うんだだけね。今16校ありますが、13校減がいいって言うんだけど、でもよく考えてみると、地域高校は2学級でも維持しますと言っているわけです。さっきの中条の問題はどうなるかわかりませんが、犀峽や北部もいずれ3か2ですよ。

そうすると、その分また上乘せするわけですよ。だから5.5で単純に割って13という数字が出る。それで5校、6校減らすという話になっているだけです。合理的なものはないのです。だから、この推進委員会では状況を見て、地域の状況を見て、減らさなくていいところは減らさなくていいとすべきだと思うんです。

だからそういう点では、この長野南と松代の問題は、このような案のようにすべきじゃないと思います。まったく根拠がないというふうに。

(中村委員長)

はい。ほかにご意見はございますでしょうか。

(吉江高校教育課長)

一点よろしいですか。

(中村委員長)

はい、事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

今、いろいろな数字のお話が出ておりますけれど、あらためて委員の皆さんにご理解いただく点がありますのが、全て今現在で、もうすでに3区にしましても、4区につきましても、県内平均の数字よりも生徒数は下回っている数字になっていると。いわゆる県内平均ですと65に対して、この地域はそれぞれもうすでに64とか、そういう数字になっているということと、それから平成31年に至りますと、4区、5区につきまして、さらに落ち込んで来るとというのが、これは現実です。

この現実の中で、ある程度以上の、先ほどもお話がございましたが、例えばそれぞれの地域の学校を残すとすれば、その地域の学校に私どもとすれば魅力を持たせて、例えばの話が今現在のように2学級募集なのに、1学級程度しか集まらないような学校には、ぜひ2学級集まって、いわゆる80人です。80人が集まるような学校にしていきたいという前提で考えております。

そういうような形を取りますと、当然ながらある程度以上の生徒を確保する上で、学校の活性化を図ったとする場合に、ある程度以上の学校の再編ということも考えて行かざるを得ないということとはご理解いただきたいと思います。

(中村委員長)

ほかにごございますか。

今の丸山委員のご説明と事務局のご説明で、違っているところというのは、丸山委員のご説明では10年間は学級数が大規模なところも含めて維持していく。事務局のほうは2学級を維持するには統合もしなければいけない。これは、どこか基準が違うのですか。

(丸山委員)

ちょっといいですか。

(中村委員長)

はい、丸山委員、お願いします。

数字は、多分変わらないので。

(丸山委員)

例えば、このようになると思うんですね。ちょっとメモをしてみたのですが、4区だけで見ますと、現在平成17年は38学級ですよ。少し言いますと、例えば更級農業4、坂城4、松代5、屋代5、あと長野南6、屋代南、篠ノ井7ということだと思うのですが、これは19年になると37で1校減るんですよ。

これを長野南と坂城がなくなったとしたら、37学級ですから篠ノ井も8、屋代南も8、屋代高校9、これは篠ノ井9でもいいのです。あと更級農業4、松代8というようなことになるわけです。松代というか、統合高校ね。統合高校が8というようなことになって、これはだから、長野南や坂城が残ったとして、これは6でそろえられますね、基本的に。37でも。

屋代南が5になるか、現状の5になるとして、あとは6でそろえられる。これが37学級の規模です。37が19年度からですね。21年も35といいますが、あと22年38、あと36、36、35、34、36と。それで29年、30年まで33、34ということですよ。だから確かに31年にも31学級になりますから、これはかなり減っていきますよね。

30年ぐらいまでは当然6とか5とかいう、いわゆる標準規模の学校が維持できるのです。だから小規模になって活力が落ちると言いましたが、検討委員会の中では5.5学級だとか6学級と言っているわけですから、その標準規模は維持できるということです。

それとそれに関連して3区との関連ですが、3区も同じようなことが言えます。それは北部や犀峡などは、3か2ですよ。これが4や5や6になるということはありません。

そうするとそうやってくると、例えば19年度になると3区のほうも、中条をつぶすだけでも8や7が出てくる。これを中条を2で残したとしたって、あるいはそれがどうなるかわかりませんが、これは8と7がずっと続いて、8と7を、あるいは6、7、7がずっと続いていくような状況になるわけです。

これが例えば3区で言う、平成31年になると、7と6。長野高校を7として、あとは6、普通高校6ですね。それで何とか31年も31学級で維持できるわけですよ。ところがこのところをもっと一定の規模を大きくしてということは、つまり3区こういう学校を少し大勢流れているから、そっちを大きくして4区のほうを減らすという言い方ですよ。

どっちも、そんなに小規模になって困るほどのところまで減らないということです。そういう計算を、私はしてみたのです。だからそんなに言うほど、小規模校になって大変だということではないんです、この3区、4区は。今わかっている10年間、十数年間の間は。

そういうことがあるのに、何で長野南なのかということがよくわからない。

(吉江高校教育課長)

よろしいですか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

今の、この個別の議論とは別に全体的なお話がございますので申し上げますと、私どもは基本的にこれからの推移というのをポイントで見えていかないで帯で考えています。それで帯で考えた場合に、先ほど来話が出ておりますように、それぞれの通学区の数というものをお出ししてまして、それというのは結果的には、時期の中で例えばこれから先が上昇するような時期がございます。

これはなぜ、このときの生徒数が増えるのかというのが、実のところ全国的にもよくわかりません。人によりますと、皇太子のご結婚の関係があるんじゃないかとか、あるいはひとつの区切りの年度、いわゆる 2000 年とかですね。そういうようなものにかかわっての動きじゃないかとかいうようなことをおっしゃる方がいますが、ひとつの流れとして実際のところ、それをわかっているわけではございませんが、でこぼこはございます。

ただ、でこぼこはありまして、基本的に今すでにピーク時に比べると 3 分の 2 以下に落ちているという、これはもうまがいもない事実です。それとさらに、これから先このまま生徒数の実数で積算した場合に、53、54 パーセントになっていると、ピーク時に比べると。それもまがいもない事実です。

それを考えた場合に、ある意味 6 学級うんぬんという議論はありますが、全体的な総数の議論という場合には、個々の学校の議論よりも、私どもは全体的な学校の議論をせざるを得ない。その学校の議論をした場合に、ある程度以上全県的に見た場合に、生徒数を確保する、あるいはそれぞれの学校の規模を確保する場合には、ある程度以上の統合というのはやむを得ないという前提に立って、こういうような数字をお出ししています。

これをやったとしても、以前報告書でお出したように、平成 31 年には全県平均で平均 5 学級を、もうすでに割るような事態になります。4.9 幾つという数字が、確かあったかと思いますが、そういうような数字になっていくというような現状が、このような統合ということをやっても、間もなくはそういう事例になってしまいます。それが決して私どもはいいと考えているわけではないということは、前々からご説明しておりますので、その点をご承知いただきたいと思います。

(小山(元)委員)

もう一点、ちょっとお聞きしたいことがあるわけですが、先ほど事務局が説明された 7 ページのところで拝見しますと、長野南高の場合に広徳中、更北中、この 2 つについての資料が出ていますね。それで説明されましたが、私が先ほど申し上げましたように、更北、川中島地区という、ひとつの広い範囲で、とらえているものですから、川中島中学校からの進学者を今ちょっと資料をいただいたのを見てみますと、川中島は今回 10 名、全体で 33 名の生徒がいらっしゃいますが、篠ノ井も、篠西からも 24 名という大量の人数が、やっぱり行っているわけでございますね。

やはり広い範囲でとらえてみていくと、2 つの中学だけではなくてということで。それで人口の推移で、例えば 15 歳の年齢推移を手元にいただいてあるのですが、それを見ていきますと、今年度の場合には更北 310、川中島が 318 人ですね。それで 31 年になりますと、更北中が 374、川中島が 304 と。松代を見ますと、今年度が 202。31 年になって 99 になっちゃうんですね。

そういう減少のことを考えて見ていったときに、人口が割合に減らない更北、川中島地区にある高校を松代へ持って行って統合していくと。それを考えたときに、説明された 8 ページにちょっと出ているんですが、近隣高校の状況というところです。

そうしますと、県でお考えになっている、その中身で見ると、いわゆる松代地区のそのものの生徒数が減少しても、第 4 区の千曲市内の高校の流れを大事に考えていると取れるわけです。

上山田、それから埴生、屋代、ここに高校、中学校がたくさんあるわけですが、そちらが河東線を使つての通学というので、募集定員をじゅうぶん確保していくとも取れるわけですが、長野、こちらのほうの、川のこちらから、更北、川中島地区、篠ノ井地区ですね。もうかなり行きますが、そういうひとつの見通しでやって、そういう統合の方向を考えていらっしゃるように受け取れるんですが、そういうふうに理解してよろしいわけですか。

その点、ちょっとお聞きしたいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いいたします。

(三澤教育支援主事)

川中島中学や、確かに長野南高の周りに幾つかの中学はございますが、資料中、例えば近接する中学 2 つを挙げているということでございます。

今データとしてお挙げいただいたのでよろしいかと思いますが、川中島中学になりますと、第 3 区への流れというのがもっと多いわけでございます。もともと調整区ということで、旧通学区時代からも第 3 区へ通学している生徒が、かなり大勢いるところでありますので、3 区と 4 区の区分けというのは非常に難しい場所であるということです。

それと松代の地理的な条件といたしまして、千曲市方面などそちらのほうの生徒も入ってくることは、当然考慮しているということでご理解いただければと思います。

あとまた、須坂方面等とのつながりもございますので、比較的交通の利便性からいきますと、通学のことを考えまして生徒が集まりやすい場所にもなるだろうということであります。

(清水委員)

先ほど質問させていただいた後に、丸山委員さんからもお話がありましたように、私もまったくそのとおりだと思ってます。

つまりお聞きした内容からして、次回この長野南高校ができた経緯については、資料をいただけるということなので、それは拝見させていただきたいと思いますが、いずれにしましてもその昭和 58 年に、あの地に長野南高校ができたということは、やっぱり必要性があってできたわけで、地域の要望が多かったということも大きな要因であろうということには要因に推測できますが、それだけではないと思うのです。

そんなこともあって、その必要性があってできた高校、学校をなくしてしまうということと、それと学校を建てるということは比較になりませんが、相当大きな要因があって決まるものだとは私は思うわけで、まさに丸山委員さんがおっしゃるように、今この時期にな

って、その必要性がなくなったととても考えられないわけなんですね。

ですから私は、松代高校のことはとにかくいろいろ言うことも特にはないんですが、長野南高等学校がなくなって松代高校に統合していくという、その整合性というのがどうしても見いだせないなという気がいたします。

（中村委員長）

2 つに分かれていると思うんですが、マクロという言い方があいまいですけど、マクロで見た場合には南高が、なぜ統合されるのかというのが分かりにくくなりますし、それから今度は逆に南高を統合することをやめた場合、要するに県の教育委員会の案を再編候補案のとおりにしないという場合ですね。そのまま残すということになったときに、マクロで見た場合のことが達成できないわけですね。そこに抵触するということになると思うんですね。

それは多分全県統一の基準の 5.5 を目標にしている学級数になると思いますが、それは丸山さんのご意見で、そうはならないとおっしゃっている。統合をやめた場合に、どういふ影響が出るのかですね。例えば地域校の定員をどんどん減らしていかなければいけないのか、その辺が問題だと思いますね。

それと南高でなくても、マクロに見た場合にはほかでも構わないのか。南高、松代の関係でなくても、マクロ的に見れば別の候補案もあるのかという、その点だと思います。

もう少し議論をいただきたいと思いますが、ほかにご意見はないでしょうか。

今のところ、積極的に統合を進めるという方向はご意見ないように思いますが。

（市川委員）

本来は非常に難しい、私もなかなか理解できにくい場面があったので、こういう提案はいかがでしょうか。例えばわれわれの今、これを統合する、しないという問題、非常に問題になっているのですが、例えばわれわれの今これを統合する、しないという問題、非常に問題になっていますが、5 年後に見直して、人口動向がどうかとか、あるいはまた県から出ている数値に正しいとか、その辺を検討してそこで 2 校をどうしようかという再検討とは、こういう場面ではできないものなのではないでしょうか。

（中村委員長）

推進委員会の役割としては、最終報告に基づいて基準に従って再編整備を進める方向で考えていくということですので、それから進めるときには一度に計画を進めないと、全県の影響があります。それから中学生の受験の迷いとか、そういう影響が非常に大きくなっていきます。

ですから計画は一度に、実行する時には多分段階を踏まないといけないと思いますが、5 年後に見直すというのは、今の最終報告の基準とはちょっと違うのかなという気はしますが、事務局いかがでしょうか。



(吉江高校教育課長)

今、お話がございましたように、基本的にはほかの地区も含めて、今、現在の私どものほうで当初お示したスケジュールの方向で議論いただいております。そんなことの中で、可能な限りの方向性をつけていただきたいと考えています。

現実問題といたしますと、いろいろと議論はあろうかと思いますが、方向としましてひとつのベクトルは確実に生徒の数が少なくなっていく。また以前お示した資料の中で、県の人口動態の統計の予測もお示したところがあるかと思いますが、私どもの実数に基づいてのデータ以上に、これからはさらに進んで減っていくというような状況でございますので、それを見据えた場合にある程度の時点で、ある程度の方向性をお決めいただいた上で、また今後の課題とすれば将来的な問題として、いずれかの時点でまた再検討する時期があるのだろうと考えている次第です。

(中村委員長)

市川委員、よろしいですか。

(市川委員)

たびたびすみません。先ほど委員長のお話の中で、例えばこの2校が残るとして、ほかのところでもという話があったのを、それはこの辺でやるべきなんですか。そういうこともあり得るのですか、選択肢として。どことはわからないのですが。

(中村委員長)

最初からそういうふうに推進委員会は、対案があれば出していくという立場だと思うんですが、なかなかそれが難しいですね。委員さんの立場もありますし、ですから地域からご意見をいただきながら、それを参考にして、さらに候補案を検討していく。課題があれば、それを挙げていくということだと思いますが、もちろん推進委員さんからも対案といたしますか、こちらのほうがいい再編になるんだというご意見をいただいておりますので、それは議論していくということです。

ですから、南高、松代高の統合というのは、これはあまり理由がなくてさらに残すべき理由のほうが多いということであれば、そういうご意見、報告をまとめていくということだと思います。

そうすると、今度は推進委員会が任された何校減という、これは全県統一の基準ですので、それに対しての配慮をしなければいけないのではないかと思います。それは人口が減っていったって、どこかに影響が出るわけで、統合していかないということであれば。その影響が、どこに出るのか。もしかしたら地域高に行く人が、もっと減っていったしまう。その辺のことを検討しないといけないと思います。

12月に入ってしまったいますし、報告の期限というのがあります。期限が第一というわけではありませんけれど、やはりまとめをしていくというのはきちんとやらないといけないことですね。

ですからここで新たな候補案を挙げてというのは、もう時間的には無理だと思います。ですので例えば、例えばですよ。またこれは委員発言と言われれば困りますが、須坂地区

第2区ということで、中野地区での再編整備の計画で、そちらで行っているからということではありますが、長野市の影響が非常に大きく、長野という第3区の影響を非常に多く受ける場所ですから、流出入の関係も考えれば須坂地区での再編というものも、例えば要望をしていく。これからますます充実した教育をしていく上では、地区での議論を、推進委員会が要望するとか、そういうようなことはやっていけないかなと思います。

推進委員会では、どこどこを統合してというのは、なかなか言い出せないことであれば。ですから、候補案として南と松代が挙がっていますので、その課題を議論いただいて、結論が出ればそちらの方向でまとめていくということですね。

今日の段階でいただいている意見は、人口の増加、それから流出入の関係というのがやはり学校の配置の問題と絡んでいて、残すべきだという。南高は、そのところの存続すべきだというご意見だったと思います。

これは事務局のご説明ですと、そういう局所的な人口動向というよりは、マクロで見た場合には南高に妥当性があるというご説明ですので、そこがちょっと食い違っているところだと思います。

ほかにご意見はございますか。一番は、課題ですね。南と松代を統合した場合の、課題を挙げていただければ。

(丸山委員)

ひとつは、繰り返しみたいになりますが、やっぱり長野南の問題というのは、一番はそれを造ったときのことも考えると、やっぱり配置ですよ。もともと高校というのは、いろいろな歴史がありますから、そんなにきれいに配置されているわけではないです。しかし、造った経過、新設した経過とか考えて、やっぱり高校の配置の薄いところに造っていくという要望が、もちろんあったと思うんでね。そういう点では、かなりブランクになるということはあると思います。それが一番、やっぱり大きい。

それからもうひとつ、先ほどいろいろ数字といって、事務局もいろいろな説明をしていますが、どのように考えているのか。例えば、5.5 学級というのは、実はあの基準は県民のアンケートですよ。その一番の根本のところ、やっぱり考えて議論する必要があると思います。

いろいろ議論は検討委員会でやりましたが、結局その基準は県民のアンケート、つまり学校はどのくらい、高校はどのくらいの規模がいいですかといったときに、3から4と、5から6が多かった。県民の意識としては、5から6だけが多かったわけじゃない。3から4も多かったのです。

つまり県民の意識としては、3から4も高校の規模としてはいいのではないかという話ですよ。ところが2学級を維持するということも、地域高校としてはあるということなので、3、4は外して5、6で半分で行っていくという話なんですよ。

それでいろいろな数字が、どれだけ減らすかという数字が基本的に出てきているわけです。それは私はものすごく、合理性がないと思いますが、それからもうひとつ、ちょっとこういうことが言えると思うんですよ。

例えば、今ちょっと計算をしてみたけど、この4区でいうと平成31年に、もしそのまま今の学校を残すとしたら、例えばこういう配置になるかどうかわかりませんが、5 クラス

の学校が3つ、4クラスの学校が4つ、これで31学級ですよ。5クラスが3つ、4クラスが4つ。

その4クラスというときに、どこが4クラスになるか、どこが5になるかはいろいろあると思いますが、例えば農業高校や、あるいはこの中での地域高校と言えるような学校などは、今だって4というところになっているところあるわけですから。そうするとこれが5.5じゃなくちゃいけないとか、6じゃなきゃいけないとかってならないと思うんですよ。

そうすると4学級が4つあり、5学級が3つあるのが、今わかる範囲での平成31年の4区の学級配置なんですよ。全部、坂城も屋代南も松代も残したとして。それから長野南ですね。それを残したとしても、そういう配置なんですよ。そうすると5が3つで、4が4つという、その学校の配置は小規模すぎて教育力が落ちるということなのかどうか。

つまり5.5と言っているんだから、5があったっていいんじゃないかということと、それから4というのは、じゃあ全部5.5以上じゃなきゃいけないのか。例えば、地域高校はわかりますね。2でもしょうがないって、もともとないから。もともとがないから、数がないということはわかりますが、例えば都市部の中でも、前から私が言っているように、今の学校格差があるような状況の中ではといっても、現実にあるわけですから。いろいろ問題を抱えた子が集まる学校は、当然出てくるわけですよ。

そういうところは、やっぱり4とか5でもいいと、4でもいいというような考え方はいいのかということです。つまりもう一遍はっきり言うと、この4区については平成31年では5学級3つ、4学級が4つという配置になる。今のまま残したとしても。それでいいんじゃないか、私はいいんじゃないかと思うんです。その先は、まだわからないですからね。その先は減っちゃうから、今から減らしておけということなのか。そういうことが、ひとつあると思うんです。

だから5.5というのは、全部5.5じゃなくちゃいけないとか、全部6じゃなきゃいけないとかっていう、そういうことじゃないんじゃないかという問題が、ひとつあると思うんです。

つまり、減らす数というのは、必ずしもそういう合理性がないので、もう少し厳密に、細かく地域ごとに考えたほうがいいんじゃないかと思います。

(中村委員長)

はい。多分それをうまく、4、5という形で配置といいますか、うまく分散できるかどうかという、それも疑問になりますので、ある程度の規模のある学校が残っていく。そうすると4、5というところではなくて、もっと少ない人数の規模の学校も出てきてしまう。これは学校の魅力や配置、システムの魅力や、そういういろいろなものの関係で出てくると思いますが、全部を一律に同じ規模の学校にというのはなかなか難しいとは思いますが、丸山委員、その辺はどうでしょうか。

(丸山委員)

今の4区のことで言うと、地域を見てもらうと、そんなに辺地校はないわけですから。それから募集定員で決めるんですから。確かに、集まらないという場合もありますよね。募集定員を4学級と決めたら、その学校が集まらないということもありますよ。そうい

うことはあるかもしれませんが、募集定員で決めるんだから。

県が言っている話は、今は大学区になっていてあちこち動き回るんだから、生徒は遠いところまで行くんだからという話なら、募集定員をこのように決めれば、特に都市部というか、あまり田舎の山のほうへ入っていくような学校がない地域は、一定の募集定員を決めれば、それなりばらけると思いますよ。

そんなにひとつの学校が、4とか5とか決めただけ2になってしまうということはないと思いますよ。それが、今そういうふうにしてどこかへ入れるように、それでも相談しながら、自分の希望を合わせながら行くわけですから。だから、4と5の学級が2校そろえたとして、どこかがどんどん減っていったり2になったり1になったり、だめになるというようなことは、それは魅力があれば魅力のあるところへ行くと、そういう競争にはなるかもしれませんが、そんなにひとつの学校が、どんどん減っていったりしてしまうということはない。

それは例えば田舎のほうにあって通いにくいか、特別何かがあった場合にはわかりませんが、一般的に考えたらそういうことが言える。だから4区では、長野南と松代を残す、坂城も取りあえず残すという形になった場合に、それは4と5で持っていける。今わかっている、今生まれたところでわかっている31年までは、それで持っていける。その5と4の配置でいけないのか、私はいけないとは思わない。

（小山（壽）委員）

4区だけを見ていると、確におっしゃるとおりだと思うんです。ただ長野県全体を見たときに、言ってみれば4区も3区も都市部なんですよ。都市部において、ある程度の規模を維持しないと、周辺部での小さな規模の学校の存続が難しくなってくる。トータルとしての学校数ということを考えたときには、都市部地域については、ちょっとある程度の大きな規模の学校でないと、学校でやってもらわないと、周辺部の学校の小さな規模の学校の維持が難しくなってくる。トータルとしての学校数というものを、想定しなければいけないのではないかと思います。

そういう意味で言うと、この4区の、非常に交通の便のいい都市部地域で、4学級、5学級というような小さな規模、というのはすべての学校がそういう小さな規模になるということでは、やっぱりまずいのではないかと考えています。

（吉江高校教育課長）

すみません。ちょっと、若干誤解があってもいいと思いますので、申し上げたいと思いますが、私どもは当初、平成17年の段階で、この推進委員会にお出しした資料といたしますと、旧第4通学区で見ました折には、今年の募集定員はトータル38。その38が、36になるということで、2クラス減になると思っております。

ところが、今回あらためて18年度の募集定員を積算したところが、さらにマイナス1クラスで35学級にしないと、どうもいけないなということの中から、来年はすでに4クラス募集の学校が、この地区には3つ出ます。

それでこの3つ出るということは、今、丸山委員さんからいろいろご指摘はいただきましたが、少なくともこれから先は3学級募集の学校が、幾つもの地域にも出てしまうと

いう認識をしております。

それとある意味、小山委員さんからお話しいただいたものと連動する面があるかと思いますが、仮にこの旧第4通学区において先ほど来議論が出ておりますように、長野南高校の地域が、人口がどうだといえますと、それでいても減ということは、むしろ旧第4通学区においてはほかの地域で人口が減になるということです。それでトータルが減ることになります。

ということは、結果的にどこの地域が減になるかというのはあえて申しません。申しませんが、そういう地域であれば学校はどうするのかというような議論にもなってまいります。

それともうひとつ申し添えたいと思いますが、最終報告の中ではやはり規模の多様化ということは認めているわけです。ですから基本的に「標準目標値としての6学級」というようなことは、あまり言及をしておりません。

例えば新設する場合はどうだというような議論はしてございますが、基本的に長野県の場合には新設校は想定しておりませんし、また今後も総合学科高校とかを造る場合には、6学級というのは配慮しなければいけないですが、ある程度の規模はそれぞれの地区ごとの実情に応じて、その規模のメリットを生かすんだというような位置付けになっております。

ということも含めて、それぞれの時点において、この時点というのはそれぞれの年度です。年度におきまして、その学校において若干多い募集の時期、あるいは落ち込む時期というのは当然ありながらも、総体としての方向性が先ほど申し上げたような形で動いているということは、ぜひご理解いただきたいと思います。

(丸山委員)

そういうことですが18年やってみたら、この前私たちがいただいた数、中卒者2,038人、4区ね。推定学級数36というのは、それは35になったということですか。そうすると19年以降、この数字は変わるということですか。

でも、中卒者数も全部変わっちゃうんですか。18年度は、最初にもらった2,038でも違うと、減っているという数は、じゃあそういうことなんだろうと思いますが、19年度以降のこの表は違うということですね。そこはどうなんですか。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(篠原教育幹)

先ほど課長が申し上げましたとおり、募集定数を算定するのは、年度毎に算定してまいります。35、36という予定が、35という、現実的には35になったということ、敷延するわけには、これはとてもいきません。というのは「わからないことはわからない」ということで、現実的に年度毎で決めていくということになります。その辺は、ぜひご理解いただきたいと思います。

それから先ほど、5.5というものの合理性というものに疑いがあるというふうなご意見が、丸山委員さんから出ましたが、5.5という数字、この数字で全体を考えざるを得ない

というのは、これはひとつ非常に大事な点であろうかと思います。

ただし再三申し上げているとおり、2 学級という学校があれば、当然 8 学級という学校も現実的にはあるわけです。それからもうひとつ、5 学級規模、それから 4 学級規模でいいと、5 が 3 校、4 が 4 校でいいのではないかというご意見もございますが、実際に丸山委員さんもそうですし、私もそうなんですけれど、現場の教員の感覚、これは感覚で誠に申し訳ないんですが、感覚からしますと 5、4 というよりも、あえて言いますと 6 とか 8 という、こういった学級数で運営する。何かと校務分掌であるとか、あるいは教員の定数であるとかいったことを考えますと、そういった運営というものが非常にやりやすいということは、これは現場の感覚なんですけど、感覚で申し訳ございませんけれども、言えるということは現実的にはございます。

いずれにしても、この 4 区は流出入で申し上げますと、やはり流出が最も全県 12 区の中で多いところでございます。そういう中で、やはりこれはもちろん地理的な特性というものの中で、そんなふうになっているわけですが、そういう中でやはり大局的に 3 区、4 区、あるいは 5 区も含めてお考えいただくというのが合理的かと、そんなふうに思っております。

それから、ちょっと長くなりますが、設立の経緯ということは、これは昭和の後半から新設校が幾つかできているわけですが、もちろん地域的な配置のバランスということはあるわけなんですけど、それにも増して非常に設置する土地の問題であるとか、あるいはちょっと申し上げにくいことではありますけど、例えば政治的な駆け引きであるとか、そういったことも当然学校を設置する場合に、教育理念というものとは別に出てくる、そんなことも設置する経緯には実際にはございます。

全県的に見ましても、何でこんな場所に造ったのかという、非常に地理的な、生徒の通学がしにくい場所、こういったところにできている学校なども、実際にはございます。これは土地の値段という経済的な要因、そういったものも当然働いていると、そんなふうに思います。

ですので、単純にこの地区には高校がないから高校をつくるということではなかつたら、そんなふうに思っています。

以上です。

(中沢委員)

今第 4 区の関連で、皆さん話し合っているわけですが、この地域が比較的人口増的な可能性のある地区であり、また子どもらが外へ出ていくというよりも学校の選択制の強いことのできる地域のところですが、そこへ 2 つの課題、南高校を松代へやってしまう。そしてまた、坂城に多部制・単位制をという、当初のご提案ですが、この地域に学校を 2 つ減らすという発想そのものに無理があるなと思います。

私自身、前から申し上げていますように、各高校には設立した理念もあり、経過もあり、また支援した経過があるのだから、できる限り学校は存立していく方向を検討すべきだやと。そういう中で大事なことは、進学校と言われるところが比較的大規模で、そこへ行く、行かせる可能性が多いほうがいいことはわかっていますが、存立に向けてはそちらのほうの大規模校のクラスを削減してでも、各学校の存立ということは、その方向だけは見極め

ておいてほしいと思っております。

それとここにまた第4区の関連では、多部制・単位制ということの話が、ここの区の中では出ているのですが、何もこれは私が今まで申し上げている中で、多部制・単位制という高校というのは大事であるが、都市部に置くべきだということで、申し上げていることについては委員の皆さんの大方の賛同を得ているが、そういう中でこれから都市部で多部制・単位制が可能性のお願いというところが、どういうところにあるか。長野、須坂をまた含めて考えてほしいと思います。

たまたま私の前回の前の中において、上田と長野地域が関連する多部制・単位制をつくるという意味においては、千曲市で複数以上の高校が持っている屋代南高などもひとつの候補だよといった経過もあるわけでございます。

しかし多部制・単位制の中で考えると、長野吉田あるいは長野商業、篠ノ井、そういうところから集めていくということになれば、もっと他にあるんじゃないかと、こういうことも皆さんの中で議論していただいて、この4区というのはたまたま点でございますので、少し全体的の中でのご論議をお願いしたいと思います。

（中村委員長）

はい。そろそろ時間ということですので、今まで出ているご意見というのは、やはり人口増の地域であり、また必要性があるということで学校は残すべきだということなんですが、全県あるいは第1通学区で見た場合には、やはりその統合を進めないと影響が出てくるところもある。それに対しては、都市部の学級数減でというようなことで対応を考えたほうがいいんじゃないかというご意見もありましたけれど、影響をどう吸収するかというところが、議論していただかなければいけないと思います。

あるいは、やはり統合は進めるべきだというご意見は出ていないとは思いますが、そういうことも含めて坂城の多部制・単位制も当然全日制の普通科という観点で見ると、別へのことへの転換で、さらには通学区を相当広く取っていくということですから、地域、その高校としての学級数にも影響を与えますので、その影響をどう吸収するのかということだと思います。

あと数分ありますので、少し別の観点でもいいですので出していただいて、次回またこのあたりから進めたいと思います。

進め方のご意見もいただいております。終日開催というご意見もいただいて、1日通してやったらどうかというようなことだったのですが、私が考えるに、やはり少しご議論いただいて、それをお考えいただく時間も必要かなと思いますし、それから地域の意見も少しずつ進んでおりますから、それをできるだけ反映するには、間を置いて、間が短くなりますが、一度に1日でやってしまうということではなくて、少し間を置いたほうがいいかなということで、日程表を事務局で検討していただいたところ、どうも毎週開催で、あと来週の土曜日ぐらいですか、何かそういうような形であと2回開催できそうだとということで、その辺も含めて進め方についても、ご意見をいただきたいと思います。

議会のほうでは、初中旬、ちょっと言葉ははっきりわかりませんが、初中旬までに報告というような言葉が出ています。ですのでその辺がもうタイムリミットということ。ですから報告書にまとめていくのが、もうすでに考えていかなければいけない時

期だと思います。

ここの通学区は全体を議論してから個々の議論に入りましたので、少し繰り返しの部分があったりして、かなり充実した議論をいただいていると思います。また地域のご意見も、わずかな時間でしたがここでしゃべっていただいた、質疑の時間を取ったということで、かなり反映されていると思います。

また地域の方にも、議論を無理にお願いしたという点も、推進委員会の進度に合わせて日程を調節していただいて、活発なご議論をいただいたと思いますので、ほぼ一通りは触れてあると思います。よく結論を聞かれるのですが、大体民主主義の議論ですと、議論の過程を見ながら強い意見のところでもとめながら、それに対して別の意見も考慮した報告というふうになるうかと思えます。

決して両論併記とか、そういうことではなくて、ある特定の方向にまとまった意見が多かったのだからこうすべきである。それに際しては、こういう点に配慮していかなければいけないといったような報告になるうかと思うんですが。

ですので、こういう形で進めてあと2回、1月にもうちょっとということによろしいでしょうか。

(丸山委員)

初中旬とは、1月初中旬ですか。

(中村委員長)

初中旬という言葉が先行していますので、1月初中旬。はっきりどういう定義なのかわかりませんが。

(丸山委員)

ひとつ要望があります。

中身の候補案というか、統廃合の問題等についてのまとめ方も、ひとつありますが、もうひとつ私は全体のところの議論で、時間がないところですがぜひ議論してほしいのは、19年度一括実施ということについて、これはこの推進委員会でもちょっと問題があるんじゃないことの議論をすべきだと思うんですね。

前にもちょっと2、3の委員さんからも出ていましたが、あのとおりいくと、今の中学3年生は、自分の行く学校がどうなるかわからないまま、後輩がいるかいないかわからないまま、これから受験するわけです。私たちも、実は中野高校は来てくださる中学を全部回って、全職員でお願いとアピールをしています。そのときも、どうなるかということについては言えないわけですね。

だからそれはある意味では、何というか中学生が自分の学校が後輩がいなくなって自分が最後なんだというふうになるのかならないのかということがわからないまま受験しちゃうというのが、19年実施ということなんですよ。少なくとも、これは避けるべきだと。そういう点では実施の時期ですね。そのことについても、ぜひ議論をしてもらって附帯意見といいますか、実施方向や実施計画を作って、今度実施していく段階でのスタートのところについては、ちゃんと意見をこの委員会でも議論をしてもらって、ぜひ県教委に意見を



まとめて上げてもらいたいと思います。

その辺の議論も、ぜひしてほしいと思います。

（中村委員長）

はい。それは、ぜひ必要かなと思います。それはなかなか結論が出にくいところもあるという点もあるからですね。少し時間を置いて考えなければいけないところだと思います。

ただ計画というのは、一度に示さないと丸山委員のご心配いただいている中学生の影響というのが長引くだけになってしまうような気がするのですが、それとは違うのですか。

（丸山委員）

いや、そうじゃないです。

私は群馬の視察に行くときに、あれはフレックスでしたか。2年ぐらい前に、2年後に統合しますよ、多部制・単位制スタートですよといって、中学生にも県民にもお知らせをしたと言っていました。

そのくらいのスパンがなければ、いけないです。やっぱり中学生も、受けるときに自分の学校がどうなるか、自分が最後なのか、後があるのかないのかとわかった上で、それでも行くからと受けてもらいたい。もし、なくなる学校を受ける場合はね。

そういうこと。だから一遍にやらないで、年次的にやれっていう意見も私持っています。が、実施のところが一斉にやるということだとしても、19年というのはそういう問題がある。だから少なくとも20年実施にすべきだと思います。だってみんな、どここの学校もそうでしょう。さっきの中野高校は、あのままいけば、私とはちょっと違う意見だけど、そのままいけば、今中学3年生で中野高校を受ける生徒は、実は最後になるわけです。後輩がないんです。

そのことだってわからないまま、ちゃんと説明されないまま受験するということは、19年実施ということなんです。だから20年実施にして、例えば20年から実施だよといえ、今度2年生は、今度はおれたちが最後だ。でもおれは受けようとなるわけですよ。そういうことです。

だから一斉にするなということではないです。

（中村委員長）

わかりました。

（青木委員）

まとめ方の確認だけ、ちょっとさせていただきたいのですが、年内あと2回ですね。そして1月の初中旬にまとめに入ると。そうすると、先ほど休憩前に委員長さんは、どなたが文面をまとめていくかは、まだわからないという言葉をちょっと発言したのですが、これは基本的に委員長さんが私案として、委員長としてたたき台を出すということは、前回の委員会でおっしゃったと思いますが、まずその確認と、それがもし次回、次々回に議論した結果、委員長さんご苦労でも、年内の大変お忙しい時期にまとめて、私ども委員に配

布をしてもらって、よく読んだ上で1月の某日開かれるときに、そのたたき台に対して意見を求めて、そして最終的な方向に持っていくというスケジュールなのか、ちょっと考えていらっしゃるスケジュールをお聞かせください。

（中村委員長）

はい。そういうふうにもできると思いますが、まだ議論をいただいていないので、あと若干時間をいただいて、今のことを決めておいてしまったほうがいいと思うんですがどうでしょうか。

いろいろなまとめ方があると思うんです。分担して書いていただいて、用語の統一等を委員長がやって、それをたたき台とするという形もあるかと思いますが。

一番は、4区ありますので4つに分けてというやり方ですかね。あと全体的な、丸山委員のおっしゃったようなこと、全体的なところをまとめる。

お立場ということもあると思います。誰がどこを担当したかというようなことは明示しなくても良いと思います。委員長がまとめるということであれば、議事録から皆さんのご意見を集約するという形で、強い意見といいますか、流れとして大体皆さん、雰囲気はまとまってきて、結論はなかなか申し上げられないのがやはり地域の方への配慮とか、いろいろなことがあって、結論が出ないと思うんです。そういうものも含めてこういう意見だったと、私が判断するしかないのかなと思います。

（小山（壽）委員）

どうしても、自分の地域というものに配慮して、その思いというのはありますので、なかなか客観的に分担した場合に記載しにくいところがあるのかと思います。ほんとに、委員長さんには申し訳ないんですが、できれば以前も委員長さん一度メモみたいな形で、中間まとめみたいな、このような議論がなされてきましたと、整理を一度お出しいただいたことがあったかと思うんですが、できれば委員長さんのほうで今までの議論の流れを見ていただいて、おまとめをいただくと大変ありがたいなと思います。

（中村委員長）

わかりました。

検討委員会の最終報告の段階では、委員長さんが、まず項目を示された。こう言うところで記述しますよと項目を示されて、その後分担執筆して、それをまとめて統一して、検討委員会に諮ってまとめたというふうに記憶していますが、そのような形で、あまり年を越えてということが書かれるのかわからない状態で議論できませんので、次回ぐらいに少し概要を、項目ですね。文章ではなくて、お示しながら、あとそこに文章を、議事録からが一番だと思いますが、なかなか議事録が追いついてはいないと思うんですけど、録音は私の手元に全部ありますので、そういうものも含めて委員長がやれということであれば、まとめていきたいなと思います。

（全委員）

お願いします。

(中村委員長)

よろしいでしょうか。

それでは、ほかに何かございますか。

なければ、事務局から次回日程についてご説明をお願いしたいと思います。

(三澤教育支援主事)

次回の日程でございますが、委員の皆さま、非常にお忙しいところ、かなり協力いただいて日程をお開けいただいたりしているわけですが、12月3回ということで、もう2回12月の17日の土曜日あたり、次回どうかということでございます。

それともう1回を、その1週間目あたりでどうかと。25日あたりではどうかと思っております。時間的には午前中ということで、計画させていただけるとありがたいと思いますが。

(中村委員長)

17、25ですね。

(三澤教育支援主事)

はい。

(中村委員長)

土曜日、日曜日ですね。

(三澤教育支援主事)

土曜日、日曜日です。はい。

(中村委員長)

多分ご出席が難しい委員さんもあるかと思いますが、回数が多いので次の回に出ていただくということで参加していただきたいと思います。

また時間等は、皆様のご都合の一番いいところというふうに、お願いいたします。

ほかに何か。

(中沢委員)

17は午前中ということでいいんですね。

(三澤教育支援主事)

はい、両日とも午前中で考えております。

(中村委員長)

はい、それでは次回 14 回は、第 4 区のことで残っているところ。多分難しい議論かもしれませんが、それを進めたいと思います。

それでは、第 13 回の高等学校改革プラン推進委員会を、これで閉じさせていただきます。ありがとうございました。